

279-16

文學士 大町桂月校訂
横田章著

讀書力の養成

東京

廣文堂書店發行



讀書力の養成序文

汽車の中や、電車の中や、停車場の待合室やにて、をり
をり新聞、雑誌の類を音讀する人あるを見受く。調子の
よき詩歌や美文なら、ともかく、普通の讀物を音讀する
にても、其人の讀書力は推して知るべし。一目十行とは、
天才者の事也。天才者ならずとも、讀書力十分なるもの
は、少くとも、一目一行は下るべし。字を拾うて讀む間は、
讀書も氣樂にはあらざるべし。やゝ進めば、字を拾はず
して、句を拾ふ。なほ進めば、句に拘泥せずして、作者の意
を讀む。更に一層進めば、作者の腹を見抜く。八面玲瓏、是
非妍醜、かくるゝ隈もなし。こゝに至れば、書を讀むこと、

序

文

花を見るが如く、また月を見るが如し。讀書は、こゝに人生の至樂となる也。

この書、讀書力の養成法を説くこと周密也。穩當にして、其要を得たり。初學士にとりて、登山するに、導者を得たるが如し。山に登らむには、導者を雇ふに如かず。讀書力を養成せむ者は、先輩の經驗に聽くべし。さは云へ、導者ありとも、登山の趣味を解せずんば、何かせむ。われは初學の士がこの書によりて、讀書の好導者を得たるを喜ぶと共に、天下一般、ひろく、讀書の趣味を解せむことを熱望して止まざる也。

明治四十二年一月

大町桂月

讀書力の養成 目次

- 第一章 緒論(讀書の必用なる所以)……………一
智識の必要——智識了得の方法——讀書の必要——讀書とは何ぞや
- 第二章 讀書の體(讀む人は誰か)……………六
文明國の青年——讀書嫌ひの人——讀書の良習慣を作れ
- 第三章 讀書の客體(如何なる書を読むべきか)……………一一
書籍濫造の弊——書籍撰擇の必要——書籍撰擇の標準——其一、讀書家に聞くこと——其二、

新聞雜誌の批判其三、著者の資格による撰擇
|| 其四、實際の賣れ高及版數によること || 其
五、文章に注意すること || 古書と新書との價
値如何

第四章 讀書の方法 (如何にして讀むべきや)二九

○ 第一節 總說

諸種の問題 || 讀書の第一義 || 其一、著者の
人格を知ること || 其二、著者の境遇を知ること
|| 其三、著者の時代を知ること

○ 第二節 讀書力の養成四一

理解力養成の爲めにする讀書 || 理解力と哲

學 || 記憶力の養成

第三節 書籍の購求五三

讀書家と藏書家 || 書籍購求の注意 || 其一、
植字の正確にして脱漏なきこと || 其二、價格
の底廉なること || イ、古本購求の注意 || ロ、
月賦及豫約購求の注意 || ハ、講義録購讀の注
意 || 其三、保存に適し取扱に簡便なること

○ 第四節 書籍の整理六九

讀書目録 || 目録調製の注意

○ 第五節 讀書の注意七三

順風に帆を擧ぐるには || 其一、間口を廣く奥

行を廣くせよ——其二、卒讀の價值如何——其三、主要なる根幹は何にありや——第四章節の主眼を捕ふるの法如何——其五、圖解の要——其六、讀書の段階——其七、熟讀吭味の價值——其八、著者及時代研究の爲めにする讀書

第五章 讀書の效果(緒論)……………八五

以上の概括——讀書の效果と讀書の目的——一般に現はるべき讀書の效果——其一、智識を開發し識見を擴張す——其二、精神を修養し人格を高尙ならしむ——其三、趣味を養ひ快樂を享受す 目次終

讀書力の養成

文學士 大町 桂 月 訂

横 田 章 著

第一章 緒論

(讀書の必要なる所以)

智識の必要

智識の必要 凡そ人間世に處するや智識を必要とす、智識は處世の方針を指示する羅針盤なり、生活の基礎を明にする燈明臺なり、即ち智識の指示せざる方向は暗く、智識の照らさざる基礎は危ふし、蓋し智識は人間に行ふ可き

道を教へ依る可き理想を語る至高の教範者なればなり、
智識は亦た常に實行の上にも大なる影響を及ぼす事明白
なり即ち知と行とは密接の關係を有するものにして人間
活動の原料は其大部分智識なるべし例へば某の事は眞な
り某の事は偽なりと知りたらんには其偽は避けて眞を取
り亦た某の事は善なり某の事は惡なりと知りたらんには
其惡は避けて其善に向ふが人間の常徑なり今假りに現今
實際の有様は之れと反對の現象を呈して惡しき事と知り
つゝ行ひ善き事と知りつゝ顧みざるが如き事ありとする
も、それは人間本來の常徑にあらずして變則破格の一次的現

象に過ぎざるべし、兎にも角にも文明人士の理想としては
總ての行動が智識の興へたる原料に依るべき事至當なら
んと思考すされば智識が實行と相關聯し居る事は理論上
よりするも實際上よりするも否定する能はざる眞理なり
◎智識了得の方法◎以上陳ぶる所によりて智識の必
要なる事は明白となれり然らば斯の如き必要なる智識を
充分に了得するには如何なる方法に依る可きか之次に
起り來る問題なりとす、
智識了得の方法としては學校教育に依るべきや勿論なり
と雖ども多忙なる人間何時迄も此方法に依りてのみ智識

の必要を充たす事は決して出来得べきにあらず、殊に亦た
學校教育の如きは單に智識を了得するに就て依る可き範
疇を與ふるに過ぎざるものと謂ふ可く、到底此の方法のみ
を以て充分なりとは謂ひ難し、智識は活物なり、絶えず進歩
して止まる所なし、極端に謂へば少年時代に受けたる教授
の内容は、學校を終へて後日世に出づるの時は已に陳腐に
屬し、何等の用を爲さざるに至るやも計り難し、果して然ら
ば學校教育のみにては到底吾人の要求を満足せしめ得べ
からざるなり、

讀書の必要

然らば此の活物たる智識を充分了得

し其効用を完からしめんには如何なる方法によるを最も
可とすべきか、吾人の考ふる所を以てすれば、自修を措いて
他に何物をも見出す能はず、自修の重なるものは讀書なり
即ち永久不斷の讀書は實に進歩的活物たる智識の眞髓を
捕捉するに最も適當なる方便ならずや、然り讀書は吾人に
取りて永久に必要なり、急務なり、

讀書とは何か

讀書とは書籍の内容を理解する事

なり、別言すれば著者の眞意を書籍によりて了解するを讀
書と云ふ、此の意味に従へば讀書の成立要件とも見るべき
もの四あり、讀む人即ち讀書の主體は其一なり、讀むべき書

籍即ち讀書の客體は其二なり、如何にして讀む可きか即ち讀書の方法は其三なり、讀みて如何なる効果あるか即ち讀書の効果は其四なり、以下此順に従て聊か陳ぶる所あらんとす、

第一章 讀書の主體

(讀む人は誰か)

文明國の青年 最も多く讀書の必要に迫り居るものは如何なる種類、如何なる階級に屬する人なるか、場所を標準として謂へば野蕃人よりも文明人なり、文明人は何故に讀書を必要とするか、文明は社會人類の理想にして、其理

想たる文明を構成する智識は讀書に負ふ所大なればなり、次に年齢より謂へば老者よりも青年なり、青年は何故に讀書を必要とするか、青年は老者よりも、幼者よりも、多く社會に活動すべき任務を有するものにして、而して其活動の原料とも云ふ可き智識は亦た之れ讀書に負ふ所大なればなり、要するに文明國の青年たる吾人は實に讀書の必要に迫り、其急務を感じ居るものなり、然らば現今の青年は果して此の急務を自覺し居るか、文明國の青年にして讀書の必要を認めざる程の者は尠なかるべし、即ち此の急務を自覺せざるが如き者は素より尠なかるべし、

讀書の餘暇
なしと謂ふ
勿れ

讀書嫌ひ

る可しと雖も然れ共之れを實行せざる者多きは甚だ遺憾
なりとす讀書の餘暇なしと曰ふ勿れ終日圍碁に耽り寢食
を忘るゝ迄に餘暇あるにあらずや酒を貪りて終夜醉舞し
尙ほ飽き足らずして狂亂する迄に餘暇あるにあらずや讀
書の餘暇なきにあらず餘暇なきは作らざるなり
讀書嫌ひ 讀書の必要を認め尙ほ其急務を自覺す
るに關はらず若し讀書が嫌ひなりとの故を以て之れが實
行を躊躇するものあらんか其意思の薄弱なる事驚くに絶
えたり苟くも必要を認め急務を自覺したるものが只だ嫌
ひなりとの故を以て之れを放棄して差支なきか極端に曰

讀書の良習
慣を作れ

へば其惡事たるを自覺しつゝも自己の嗜好に適するの故
を以て尙惡事を働きて差支なきか豈に斯の如き理あらん
や嫌ひなりと雖も理に合すれば進んで之れを行ふは之れ
理性を供へたる人間の特色にあらずや讀書たると否とに
關はらず人間の行動は成る可く合理的なる可し自己の好
き嫌ひ即ち感情によりてのみ行動するは下等動物の事な
り
讀書の良習慣を作れ さはあれ嫌ひなる事は中
々行ひ難し之れ總ての動物に共通したる弱點にして聊か
口惜しき感なき能はず然れども好かぬと云ふは概して行

はざるの結果にして所謂食はず嫌ひなり別言すれば爲し能はざるにあらすして爲さざるなり即ち爲さざるが故に益々嫌ひとなり遂に爲し能はざるに至るなり讀書も絶えず之れを行ふときは其間に色々の趣味湧き來りて漸々嫌ひは減少し去ると同時に亦た好きの度が増加し來るものなり初めは必要に迫りて其苦痛を押へつゝ爲したるものが後には次第に習慣となりて愈々快味を増加し遂には反て罷めんとするも能はざるに至るが常なりされば讀書にせよ其他の行爲にせよ合理的良習慣を作るは必要なりと思考す即ち悪しき習慣を打破して合理的に行動し其合理

的行動を習慣境に迄到達せしむるを要す而して其合理的たるには亦た讀書に原料を借らざる可からず

第三章 讀書の客體

(如何なる書を讀む可きか)

讀書の客體は書籍なり如何なる書籍が最も讀むに價す可き善良のものなるかを明にするは本項の主眼なり

書籍濫造の弊 古昔書籍製造術の進歩せざりし時

代に於ては書籍撰擇の問題は左程重要ならず蓋し其時代に於ては撰擇に供す可き程書籍の存在せざりしが爲めなり故に此時代に於ては多くは數人共同して順番に廻讀し

或は借りて読み、或は全部寫本する等、今人の想像し得べからざる苦心の下に研學せりとの事なり、福澤翁の如きも或字書を全部筆寫せる事ありとか其苦心察す可きなり、然るに活字の發明、機械印刷術の進歩は、昔日の不便を除却すると同時に延いて書籍濫造の弊を來たし、幾多印刷工場、の輪轉機は其内容の良否を問はず、日々何千種何萬卷の書籍を製造し、或はクロース製となり、或は脊皮製、金文字入りとなりて書店に堆積せらるゝもの、地方に運搬せらるゝもの、幾千幾億汗牛充棟も、管ならざるは、現今出版界の狀態なり、而して其裝釘の美なる之れを外面より見るときは、表裝紙

質何れも美にして高尚、書架に整列し、机邊を裝飾するに於て、間然する所なし、然れども、翻て其内容の如何を檢せんか、何々學士著、何々博士監修と堂々表銘せる高價精巧の物にして、尙ほ噴飯に價するもの、尠しとせず、況んや碌々たる自稱學者無責任の濫造書籍をや、
書籍撰擇の必要 斯の如く現時の出版界は、書籍製造術の進歩と共に一面に於ては如何なる書籍と雖も容易に机邊に備付くるを得ると同時に、他面に於ては濫造の結果、其何れが讀むに價するや、内容良否の撰擇に就て大に苦ましむるものあるに至れり、從て何等の効果なきのみか

反て有害なる書籍を濫讀し、貴重なる時間と精力と書籍代
とを空費し、今更らの如く嘆息する事あるは讀者の屢々實
驗せらるゝ所ならんと信ず、書籍撰擇の必要於爰乎生ず、
書籍撰擇の標準 學問には其種類多し、故に其如
何なる種類の書籍を讀む可きかは各自の向ふ可き方面に
よりて定まるものなり、即ち醫者たらんとするものは醫學
の書を讀む可く、法官たらんとするものは法學の書を學ぶ
可く、斯の如きは豫め一括して陳べ得べきものにあらず、否
な陳ぶるの必要を見ざるなり、今爰に吾人の論せんとする
所は其種類の撰擇にあらずして其内容の撰擇なり、即ち其

内容の良否を撰擇するの標準を明にせんといするにあり、以
下順次説明す可し、

第一◎ 讀書家に聞きて撰擇する事 讀書家は

多數の書籍を讀破したる結果、自己の經驗と記憶とにより
て概ね内容の良否を判定し得るものなり、然れども人は各
々其顔の異なるが如くに其趣味を異にし、其意見を異にし、
其理想を異にす、之れが爲めに或は先入主となり、或は毛嫌
ひ等よりして判断の公平を失し、意外なる代物を推薦せら
るゝ事なしとせず、されば此の撰擇方法も絶對に良好なり
とは言ふ可からず、只數人の讀書家に質して同一なる回答

を得たるが如き場合は有力なる参考と見て可ならんのみ、
 第二新聞雑誌の批評によりて撰擇する事
 新聞は社會の耳目なり、木鐸なり、之れが批評は正さに社會
 の批評にして所謂輿論とも見る可きなり、故に理論上より
 云へば前者に優るとも決して劣るなき撰擇法にして世人
 は安んじて此の批評推薦に信頼して可なり、然れども現時
 實際の狀態より見れば、余輩は新聞雑誌の所謂新刊批評な
 るものに就て未だ直ちに信頼し難きものあり、蓋し新刊批
 評なるものは概ね批評せんが爲めに拾ひ讀みしたる結果
 にして讀みて而して批評したるものは尠げればなり、且又

新聞雑誌等には新刊の紹介を爲すに努むるもの多しと雖
 も、未だ其新舊に關はらず讀書の案内を示すものは尠し、之
 れ新聞雑誌の性質上止むを得ざる事ならんも、一面より見
 れば我社會が讀書に對する趣味の欠乏を意味するものに
 あらずして何ぞ吾人は此讀書趣味の底落を救護せんが爲
 に反て新聞雑誌等に於て學者の讀書案内又は書籍に對す
 る意見を紹介するの急務なるを信ずる也、
 第三著者の資格によりて撰擇する事、書籍
 は全く著者の學力の化身とも云ふ可きものにして、書籍を
 讀むは恰かも著者の學力を讀むに等しきものなり、換言す

れば讀書は著者に就て間接に教育を受くるが如きものにして従て學校教育に於て教師を撰擇するの必要あると等しく讀書にも亦た著者を選ぶの必要あり然らば著者の資格によるとは何か資格に二種あり一は學校卒業、學士博士等の如き形式的資格にして一は本人の素養即ち實質的資格之れなり假令ば國際法を専攻して其學力の卓越せるを公認せられ博士號を受けたる學者の如きは國際法の著述に就て其任を完ふするの資格あるべく或は又た大學を優等にて卒業し尙學理の蘊奥を極めん爲め大學院に入りてその専門の科程を終了したるもの、如き或は撰ばれて外

國に留學し歸朝して其名の學界に鳴るもの、如き斯かる形式的資格も亦た大に著者の學力を窺ふの參考とするに足るものあり然れども帝國大學卒業者の總てに冠したる學士號の如きは或る一部の人が信する如く有難きものにあらず悲しき事には近頃の新學士連の手に成れるの書籍の大概は術語の製造と獨逸思想の請け賣りに吸々として難解朦朧余輩の満足に價するもの稀なり斯の如きは其著作家が自己の腦漿より出でたるものにあらずして只だ先進學者の糟糠を嘗め其請け賣りに急なると一には未だ充分の素養なくして急に名を得んが爲めに無謀の計畫に出

でたる結果なり、殊に翻譯物の如きは難澁にして意通せず、恰かも雲霧を隔て、月に向ふの感あり、之れ術語の直譯に急にして全體の組織文意を咀嚼せざるの結果にあらずし、何ぞ、兎に角形式的資格の尊き所以は、其根底に實質的資格即ち深き素養の僭伏せるが故なり、此の素養なくして千百の肩書何かせん、要は實質にあり、素養にあり、何等の形式肩書を有せずして、赫々たる偉名を千古は歌はるゝ大學者は古今東西其例に乏しからず、次に一言す可きは著者に就て撰擇する事の餘り當てにならざる理由あり、そは近頃著書に名を貸す事が學者界出版

界に流行する事之れなり、即ち名も知れぬ雜輩をして編輯せしめ、之れに何々博士監修等の金箔を附して市場に出すあり、監修は所謂監修なるを以て幾分之れを恕す可しとす、るも純然たる著作に名士の名を借りて讀者を欺瞞する出版界の惡徳に至つては言語道斷と云ふの外なし、否、我利私慾に吸々たる出版屋の惡徳は、兎も角も知名の學者にして假初にも其名を賣りて斯の如き不徳の行動を敢てする者あるに至つては、學界の爲めに甚だ痛嘆の至りならずや、
第四實際の賣れ行き及版數等によりて撰擇する事 初版後旬日ならずして數萬部を賣り盡し、數

月にして數十版を重ね、爲めに洛陽の紙價を高からしむる著述は概して善良なるものと謂ふ可し然れども此の版數なるもの又た頗る信頼するに足らざるものなり實際版數を重ねたるにはあらずして賣り残りの表紙を改装し以て第何版と表示し世人を瞞着して即ち狗肉を賣り付けんとする出版屋なしとせず注意せざる可からず

第五文章に注意して撰擇する事 文章は學問を解釋説明する要具なり文章にして難澁不明ならんか如何に巧妙なる學理も遂に其光澤を發揮する能はず讀者に向つて單に疲勞と眠りとを與ふるの外何等の印象を與へずして終らんのみ著書に文章を撰むの要爰に於て在り余輩の知る所を以てすれば所謂學者なるもの多くは難解の文を弄す即ち謹嚴硬直は之れあらんも流暢明快は到底望み得べきもの稀なり學問は謎にあらず恰かも烏賊の墨を吐いて北ぐるが如く其朦朧の下に潜んで御茶を濁さんか如きは決して學者の信切にあらず學問は謎にあらず明快簡易にして徹底十二分ならざる可からず皮を剥ぎ肉を排し骨に達しで罷む可きなり然れども余輩は學者に文章を良くするもの全く之れ無しとは云はず余輩の崇拜する某々氏の如きは攻究する所も深く文章又た至て明晰如

へずして終らんのみ著書に文章を撰むの要爰に於て在り余輩の知る所を以てすれば所謂學者なるもの多くは難解の文を弄す即ち謹嚴硬直は之れあらんも流暢明快は到底望み得べきもの稀なり學問は謎にあらず恰かも烏賊の墨を吐いて北ぐるが如く其朦朧の下に潜んで御茶を濁さんか如きは決して學者の信切にあらず學問は謎にあらず明快簡易にして徹底十二分ならざる可からず皮を剥ぎ肉を排し骨に達しで罷む可きなり然れども余輩は學者に文章を良くするもの全く之れ無しとは云はず余輩の崇拜する某々氏の如きは攻究する所も深く文章又た至て明晰如

何に深遠の學理も平易に説き盡して餘蘊なし、然れども斯の如きは曉天の星なり、比較的(ひかくてき)文章(ぶんしょう)の堪能(たんのう)なるは新聞雜誌(しんぶんざし)記者(きしゃ)たるもの若くば、たりし者(もの)なり、之れ一は朝夕筆(てふせきふで)を離れざるの故(ゆえ)ならんも一は本來文章(ほんらいぶんしょう)に堪能(たんのう)なるものが多くは行(ゆ)いて記者(きしゃ)となれる結果(けつこ)果(ぐ)なるべし、故(ゆえ)に若し記者(きしゃ)にして學者(がくしゃ)なるものあらば、必ず(かならず)讀(よ)むに價(あ)すべき著者(しやくしゃ)なり、現(げん)に某々氏(たががたが)の如(ごと)きは其活(そのい)ける實(じつ)例(れい)也(なり)。

要(え)するに以上(いじょう)列舉(れいこ)し來(きた)りたる標準(へうじゆん)は決(け)して絶對(ぜつたい)のものに

古書と新書

あらず、只(ただ)之(これ)等の數件(すうけん)を參考(さんこう)として撰擇(せんたく)せば比較的(ひかくてき)善(ぜん)良(りやう)なる書籍(しよせき)に會(くわ)するを得(え)ん乎(や)。

◎古書と新書の價值如何◎ 古書と新書とに就(つ)ては相反(あひはん)する意見(いけん)を持(も)つるものあり、即(すなは)ち甲(か)は曰(いは)く古酒(こしゆ)は飲(の)む可(べ)く古書(こしよ)は讀(よ)む可(べ)しと、乙(おつ)は曰(いは)く朽木(くぼく)は彫(たう)す可(べ)からず、古書(こしよ)は陳腐(ちんぷ)なり、新書(しんしよ)讀(よ)む可(べ)し、思潮(しゆく)に後(お)る可(べ)からずと、甲(か)乙(おつ)共に一部(いちぶ)は眞理(まこと)にして一部(いちぶ)は誤(あ)れるものと云(い)ふ可(べ)し、

◎腐敗せる古書◎ 古書(こしよ)には生命(せいめい)を有(あ)するものと有(あ)せざるものあり、恰(ただ)かも古酒(こしゆ)の腐敗(ふはい)せると然(しか)らざるに、有(あ)るが如(ごと)し、若(ごと)し現代(げんだい)の智識(ちしき)と全く矛盾(むじゆん)し、現代(げんだい)の思想(しきう)と全く容(ゆる)み

腐敗せる古書

れられざるが如きは生命を有せざる古書なり腐敗せる書籍なり斯の如きは只だ歴史的研究の意味に於てのみ幾分参考の價ありとは言へ知識當面の探究に向つては何等の効果を齎らす可きものにあらず單に効果を齎らざるのみならず知力の發達を妨害し文明の清流に混濁するものなり生命を有せざる古書は理化學及應用學殊に實業等に關するものに多し斯の多き古書は全く陳腐なり讀むに價せず

生命ある古書 古書にして生命を有するものは多し倫理道德に關する書籍なり哲學宗教に關する書籍なり

り詩歌文學に關する書籍なり論語聖書佛典の如きは古くして益々價値ありプラトンアリストテレスの著書今尙哲學者の參考に價す印度バラモンの哲理は近代の大家シヨウベンハウエルの哲學に如何なる影響を與へたるかは學者の已に知る所なり萬葉集の如き源氏物語の如き近松の如き馬琴の如きホメーロスの如きダンテの如きセキスピアの如き永久其生命を失ふの期は無かる可し

古書の貴き所以 然れども古書の貴きは其所説の貴きにありと云はんよりも寧ろ著者の人格に基因するもの多し論語の貴きは孔子の人格が紙上躍如せるが故なり

り、聖書の貴きも亦た然り、當世の知識によりて是等所説の本體を解剖せんか到底満足なる結果は得難かる可し、論語と云ひ聖書と云ひ其他倫理道德に關する古書の大多數は著者の人格を表象せる記號として見るに於て初めて價値あるものなり、此の點に注意せずして徒らに古書を賛するも誤れり、亦た之れを貶するも誤れり、
新書の價值 科學は近代に於て進歩せるものなり、理化動物天文等に關する自然科學を初め、政治經濟法律醫術商工業等の人事に關する學科に至る迄完全なる發達は殆んど總て近代に於て成就せるものにして之れ等知識

の探究は新書によるにあらざれば到底望み得可からず、亦哲學倫理學等に就ても前述の如く古書にして參考に價するもの尠からざると同時に、そが根本の原理は近代學者の所説に聞くにあらざれば満足なる解決を得るに難かる可し、新書は大に讀む可し、古書亦た決して棄可からず、要は其内容を良く撰擇するにあるのみ

第四章

讀書の方法

(如何にして讀むべき)

第一節

總說

諸種の問題

讀むべき人あり、讀まるべき書籍あり、

如何にして
読むべきや
深
く
廣

諸種の問題

爰に於てか如何にして読むべきかの問題を生ず此の問題に對して極めて簡單なる一語を以て答を得ざるにあらず即ち前述書籍撰擇の標準に適應せる必要の書籍を廣く深く讀むにありと云ふに歸着すべし然れども讀むとは單に見るの意にあらずして其書籍の眞意を了解するにあるを以て之れが了解に適應する丈の實力なかるべからず之に於てか讀書力養成なる問題を生ず已に讀書力を養成せば次は必要なる書籍の購求及之れが整理を爲すの要あり此二つの事業は即ち讀書の準備なり讀書の準備は如何にして讀む可きか之れなり讀書廣からざれば獨斷

に走り深からざれば淺薄に流る之れを以て其廣くして深からん事は素より讀書の要道なりと雖も人間の精力と讀むべき時間には限りありて然かも其攻究すべき事項は廣さに於ても深さに於ても殆んど盡くる所なし即ち廣くして深からん事は到底不可能に屬す於是乎廣きと深きとは何れが良きか多讀と精讀卒讀と密讀等の價值如何其他讀書の要點を摘録し全般を圖解し或は圈點を附し註記を爲す等讀書に關する諸般の注意は正に如何なるべきか等の問題を生ず爰には先づ之れ等の問題を攻究するに先立ち讀書の第一義に付き陳ぶる所あらんとす

讀書の第一義 讀書とは已に陳べたる如く著者の真意を其著書によりて解するにあるを以て讀書法の第一義は著者の思想通りに其書を解するにあり彼の徒らに牽強附會著者の真意を曲解して或は坦々たる語中に深遠計る可からざる妙理の存するが如く賞賛し或は現代の語義を以て古書を解するの結果論語も聖書も三文の價値なしとして其不朽の真理を壊亂し去らんとするが如き奇怪なる學者は其根底に於て已に讀書の第一義を忘却せるものと謂ふ可し

著者の思想通りに其著を解せんとするには凡そ左の事項

に顧慮するの要あり即ち第一著者の人格を知る事第二著者の境遇を知ること第三著者の時代を知ること之れなり、以下順次説明す可し、

第一、著者の人格を知るの要あり 書籍は其著者人格の化身なり生命なり論語の孔子に於ける聖書の耶蘇に於ける佛典の釋迦に於ける外史の山陽に於ける史記の司馬遷に於けるミゼラブルのユーゴーに於けるバラダイスロストのミルトンに於けるフワウストのゲーデーに於けるエミール懺悔録等のルーソーに於けるアンナカレニナ復活等のトルストイに於ける福翁百話の福澤翁に於

ける、總て皆な其著者人格の化身ならざるはない、今假りに士族にして商業を説き、軍人にして社會主義を講ずるものありとするも、其説き其講じたるもの、内には著者の人格如何を補捉するに難からざるものあつて存す可し、尙ほ盜賊にして倫理を談じ、遊女にして淑女を語るものありとするも、其談じ其語るもの、内に於て彼等の人格を窺ふに難からざる可し、昨は是を説き、今は非を唱え、臨機應變、適處適時に連絡なき斷片を示せるものと雖も、之れを綜合するときは、一貫せる著者の人格の躍如するあるを見るべし、論語の一片句を捉へて孔子の人格を云謂し、聖書の一隻語を引

著者を解するの法

き來りて耶蘇の主張を評論するが如きは、著者を誤り、著書を誤るものなり、著者を解せん、とせば宜しく、其全體の著述を綜合して觀察す可し、著書を解せん、とせば宜しく、著者の人格によりて判斷すべし、斯の如くせば、言々總て妙味を生じ、句々總て生命を帯び、著者の眞意亦た爰にあらんか、人或は曰く、彼れ説を變えたり讀むに價せず、彼れの説は矛盾せり、取るに足らずと、斯の如き狹隘なる考へは、多くは著者の人物に就て何等知る所なきより生ずるものにして、時に讀書を誤り、亦た著者を誤るものと云ふ可し、人何れの時代に、か進歩なからんや、已に進歩あり、變更と矛盾とを生ず

其二、著者
の境遇を知
る事(著者
の境遇の反
影なり)

る亦た當然の結果なり、蓋し進歩は現在に對す、變更にして過去に對する矛盾なればなり、説を改むるは進歩なり、著者の人格は之れによりて一步理想に近づけるなり、之れを變更と云ひ矛盾と云ひ取るに足らずと云ふ畢竟著者の理想を知らざるの結果にして讀書に著者の人格を知るの要ある所以亦た爰にあり、

第二、著者の境遇を知るの要あり

人は多くは境遇に支配せらるゝものなり、如何に其意思の強固なる人と雖も全く此の支配外に超然たるものは尠しとす、古今著作の大多數は著者の境遇を反影せるものなり、寒暑貧富

身體の不具強弱を初め、四圍の境遇は直接間接に著者の思想に影響し、何處にか著作の上に現はれ來るを常とす、沈痛なるもの、清楚なるもの、雄大なるもの、豪邁なるもの、婉麗なるもの、俗氣あるもの、皆な之れ一面著者境遇の反影として見るに於て初めて眞義の釋然たるを見るべし、バラダイスロストはミルトンの盲目なる境遇と反影せしめて益々價値あり、菅公の詩「去年の今夜」の沈痛にしてよく人を泣かしむるもの亦た之れが爲めなり、近くは中江氏の一年有半に於ける網島氏の病間録に於ける、著者の境遇と併せ讀むに於て初めて其眞義を解し得べきなり、

ける、總て皆な其著者人格の化身ならざるはない、今假りに士族にして商業を説き軍人にして社會主義を講ずるものありとするも其説き其講じたるもの、内には著者の人格如何を補捉するに難からざるものあつて存す可し、尙ほ盜賊にして倫理を談じ遊女にして淑女を語るものありとするも其談じ其語るもの、内に於て彼等の人格を窺ふに難からざる可し、昨は是を説き今は非を唱へ、臨機應變、適處適時に連絡なき斷片を示せるものと雖も、之れを綜合するときは一貫せる著者の人格の躍如するあるを見るべし、論語の一片句を捉へて孔子の人格を云謂し、聖書の一隻語を引

著者を解するの法

き來りて耶蘇の主張を評論するが如きは著者を誤り著書を誤るものなり、著者を解せんとせば宜しく其全體の著述を綜合して觀察す可し、著書を解せんとせば宜しく著者の人格によりて判斷すべし、斯の如くせば言々總て妙味を生じ句々總て生命を帯び、著者の眞意亦た爰にあらんか、人或は曰く彼れ説を變えたり讀むに價せず、彼れの説は矛盾せり取るに足らずと、斯の如き狹隘なる考へは多くは著者の人物に就て何等知る所なきより生ずるものにして、時に讀書を誤り亦た著者を誤るものと云ふ可し、人何れの時代に於て進歩なからんや、已に進歩あり、變更と矛盾とを生ず

其二、著者の境遇を知らずして、著者の境遇の反影なり。

る亦た當然の結果なり、蓋し進歩は現在に對する變更にして過去に對する矛盾なればなり、説を改むるは進歩なり、著者の人格は之れによりて一步理想に近づけるなり、之れを變更と云ひ矛盾と云ひ取るに足らずと云ふ畢竟著者の理想を知らざるの結果にして、讀書に著者の人格を知るの要ある所以亦た爰にあり、

第二、著者の境遇を知るの要あり。人は多くは境遇に支配せらるゝものなり、如何に其意思の強固なる人と雖も全く此の支配外に超然たるものは尠しとす、古今著作の大多數は著者の境遇を反影せるものなり、寒暑貧富

身體の不具強弱を初め、四圍の境遇は直接間接に著者の思想に影響し、何處にか著作の上には現はれ來るを常とす、沈痛なるもの、清楚なるもの、雄大なるもの、豪邁なるもの、婉麗なるもの、俗氣あるもの、皆な之れ一面著者境遇の反影として見るに於て初めて眞義の釋然たるを見るべし、バラダイスロストはミルトンの盲目なる境遇と反影せしめて益々價値あり、菅公の詩「去年の今夜」の沈痛にしてよく人を泣かせるもの亦た之れが爲めなり、近くば中江氏の一年有半に於ける網島氏の病間録に於ける、著者の境遇と併せ讀むに於て初めて其眞義を解し得べきなり、

其三、著者
の時代を知
る事、著者
は時代の
子なり

第三、著者の時代を知るの要あり。人は時代
を作ると同時に時代は亦た人を作るものなり。即ち人は或
意味に於て時代の子なり。如何なる大偉人と雖も時代精神
の感化を免かるゝものなし。彼のシヨペンハウエルの如き
すら尚ほ此の感化を免れずして、一面頗る詭激にして獨特
なる意見を有するに關はらず到底時代精神の圏外に溢出
する能ざりしを見ても知る可し。
人已に時代の子なりとせば書籍も亦た時代の産物として
見るに至當とす。蓋し書籍は人の子にして結核時代の孫と
も見るべきものなればなり。讀書に時代を顧るの要之れに

著書を通じ
て著者を
通して時代
を讀む

於てか生ず、
讀書は前に曰る如く著書を通じて著者の思想を讀むにあ
り、著者を通じて時代の精神を讀むにあり、讀書の興味亦た
此邊より湧き來る。若し讀書の本義爰にあらすとせば千萬
巻を讀むと雖も其得る所は片々たる文字と文句とを記憶
するに過ぎず、單に生ける本箱動く辭書たるに過ぎざらん
のみ、讀書は文字を讀み文句を記憶するの謂にあらす、文章
は畢竟思想を表章する要具のみ、記號のみ、要は本體たる著
者の思想にあり、此の思想を齎らせる人物と時代とを觀察
し、此の思想が及ばすべき感化と影響とを捉えんとするこ

と讀書の主眼なり、
 凡そ讀書を爲すに際し時代を知るの必要は多くは古書を
 解するの點にあり、即ち時代を顧みずして古書を讀むとき
 は其妙味の大半を亡失するのみならず到底其眞意を解す
 るを得ざるべし、彼の奴隸制度を認許せるの故を以てアリ
 ストートルの所説を聞くに足らずとするが如きは全く時代
 を知らざるの罪に座す、又ルソーの時代を知らずして
 論を讀まんも得る所は尠かるべし、論語にせよ、バイブル
 にせよ、佛典にせよ、如何に時代に卓立せる偉人の大著述に
 せよ、時代は常に其立論の舞臺となり、其所説の背景となり

て書中に編み込まれあるなり、時代を知らずして誰れか是
 等の著作を完全に氷解し得るものあらんや、要するに時代
 を顧みるは讀書の興味を増加すると同時に亦た其解釋を
 容易にするものにして、讀書の目的を達する良法の一なり
 とす、

第二節 讀書力の養成

讀書の準備とも見る可きもの二あり、一は讀書力の養成に
 して一は書籍の購求及整理之なり、先讀書力養成の事より
 説明すべし、

讀書力の養成

讀書力は讀書するに從て増々増大

理解力養成
の爲めには
如何なる書
やを讀むべき

すべきを以て、讀書と讀書力の養成とを全然區別するは或
點に於ては不可能ならん然れども豫め讀書力養成の方法
を講じて讀書に向ふときは比較的了解を容易にし得べく

讀書力養成の爲めには次の二點を修養せざる可からず即
ち第一に理解力を養成する事第二に記憶力を養成する事
之れなり

理解力養成の爲めにする讀書凡そ理解力養
成の爲めに研究す可き學科は種々あらんも先づ書中の文
章を理解するの基礎を作らんが爲めに文法と修辭學と論

文法

修辭學

論理學

論理學とを修むるを以て入門の第一歩とせざる可からず即
ち文法は其書籍を記述せる文章を解剖して其文意を理解
するの助けをなす點に於て必要なり修辭學は其記述説明
の仕振を玩味して讀書の興味を誘起し併せて理解を早
からしめ記憶を確かならしむる點に於て必要なり論理學
は其記述中に含まれたる論點を考查し其正否を吟味し以
て其誤りなき眞意を理解せんが爲めに必要なり兎に角右
三科目の攻究は理解力養成の一般要件なり何れの學科を
修めんとするものに向つても必ず第一に要す可き基礎的
準備的の入門科目なり

次に理解力養成の特別科目と認む可きものの内に於て基礎的の意味を有するものは數學と心理學となり、數學は自然的科學を理解するに於て欠く可からず、心理學は人事的科學を理解する上に於て欠く可からず、要するに兩者は或る意味に於て科學の基礎をなすものと云ひ得べきなり、次に基礎的の意義を有するは歴史と地理となり、歴史は時代の精神を語るものにして、地理は空間の現象を示すものなり、前者は主として人事的學問の助けをなし、後者は主として自然的科學の理解に資す、從て古書の解釋に向つて光明を齎すものは歴史なり、蓋し古書は時代の產物にして、歴史

の一部分なればなり、次に又農商業及貿易等の學問に向つて有力なる資料を供するものは地理なり、蓋し農商業貿易等は土地、產物、交通等所謂空間の現象によりて行はるべければなり、次に讀書の準備として常に座右に備へ置くべきは完全なる辭書なり、辭書は讀書家の良師友なればなり、然れども辭書は精撰せざる可からず、何となれば誤れる辭書によりて曲解するときは其曲解は先入主となつて永久更正する能はざるに至ればなり、辭書を求むるものは此注意を怠る可からず、理解力養成の基礎的學科は決して上述せる所に止

基礎は極めて強固なるを要す

まる者にあらず、要するに基礎は極めて強固ならざる可からず、恰かもピラミットの立てるが如くならんを要す、今法律學研究に例を取りて、其基礎的準備的學科を擧げんか、次の如く種々の學科を修め、廣汎なる基礎を作らざる可からず、即ち法律は人格者の行爲に關する學問なるを以て、其行爲の出所たる意識の現象を知らんが爲めに先づ心理學を修むるの要あり、次に法律上にて論ずる行爲は社會を組織したる人類の行爲なるの點より社會學研究の必要生ず、次に亦た法律が人格者の行爲を保護し、且つ制限するに就ては、其行爲の善惡正不正を判定するの必要生ず、而して此の

理解力養成としての哲學

判定を下すの標準は結局倫理學の齎らす所ならざる可からず、且亦た宗教的意識が法律行爲の動機となる事ありとせば、宗教學又た決して等閑に附す可きにあらず、尙ほ法律關係には財貨の伴ふ事多し、從て財貨に關する學問即ち經濟學を研究するの要あり、其他法律の解釋適用に向つては醫學の智識も必要なる場合あり、理化學の智識も必要なる場合あり、數へ來れば、單に一科の學問を修むる爲め、數十の基礎を要するに至る、如斯其基礎を廣汎にして初めて専門の學科を深く究明し得べきなり、蘊奥を極め得べき也、

理解力と哲學 最後に理解力養成に就て哲學の効

用を一言せんとす、上述の如く或る學科を理解するには其準備的基礎を廣くして初めて其専門の學科に深く別け入るを得べきなり、而して此の基礎を廣くすると深く別け入るとに要する準備は哲學の大要を攻究するに於て大に其完きを得べし、哲學はあらゆる學問の入門たると同時に亦た其結論なり、今哲學の概念を一言せんか宇宙の根本原理を攻究するものといひ得可し已に宇宙と云ふ其廣さに於ては無限なり、如何なる學問と雖も其本源の歸趨は哲學の内に包含せらる、先づ研究の都合上より宇宙を大別して自然と人事との二となすを得然るときはあらゆる人事科學

即ち倫理宗教社會法律等の諸學科は總て其本源と理想とを人事哲學の内より取り來らざる可からず、次にあらゆる自然科學も亦た其本源と歸趨を自然哲學の内より取り來らざる可からず、然るに此の人と自然との間に一種の反射的關係を生ず、認識關係之れなり、而して認識關係の原理を明にするものを認識論と云ふ、心理學論理學等より歸結せらるべき最高原理は此の部門に於て究明せらる可きなり、如斯哲學の攻究範圍は自然哲學、人事哲學、認識論の三大部門に區別せられ、あらゆる科學の終結は總て來りて爰に集まる、別言すれば、如何なる科學と雖も其最終の尖端は哲學

精眞
自美
人善

深きに於て
も無限なり

の關知するものと云ひ得べく、總ての科學は或る意味に於て哲學の一部分たるなり、故に哲學はあらゆる科學の入門と見るを得可し、次に根本原理とは究極に關する原理即ち原理以上の原理なり、實際界以上の理想界の原理なり、現象界以上の本體界の原理なり、之れを認識論の方面より云へば、**眞**が究極の理想なり、之れを自然哲學の方面より云へば、**美**が究極の理想なり、之れを人事哲學の方面より云へば、**善**が究極の理想なり、此の眞善美に就て究極的、根本的の解決をなすは哲學の任務なり、如斯哲學は深きに於ても究極に達す、學問中之れより深きものあるなし、之れ總ての學問の

入門にして
結論なり

記憶力養成
の方法

結論にあらすして何ぞ、哲學は總ての學問の終結を捕へて之れを其攻究物體となし、以て究極の理想を發見し、之れを科學の頭上に照らし、科學は此の光明に浴して、以て其發達を遂ぐるものなり、故に哲學は總ての科學の入門たる、同時に亦た其**結論**なり、廣きに於ても總ての科學を包含し、深きに於ても總ての科學を透徹す、故に哲學は學問の基礎を廣くするに於ても必要なる準備科目なり、深く専門の學科に別け入るに於ても**好個**なる指導者なり、**記憶力**の養成、讀書力養成の第二は記憶力を養ふにあり、記憶とは理解せるものを深く腦裡に**印**し、以て何

雜念ヲ排斥
觀念集中

非思慮底な
思慮せよ

時にても之れを現し得るの地位に置くを云ふ故に此問題
は寧ろ讀書によりて解決し得べきものありて生
理上心理上の修養に待つべき問題なり、健強なる身體は常
に健全なる精神を藏すとかや、然り記憶は精神作用なるを
以て健全なる記憶力を養成せんとせば結局健全なる精神
に俟たざる可からず、彼の記憶法の如き書籍は讀みて全く
益なきにはあらざるも、是等は枝葉の事なり、記憶の秘訣は
其根本となる可き精神を鍛鍊するにあり、彼の禪學に所謂
精神鍛鍊の術を應用し以て非思慮底を思慮するの心雜念
の排斥觀念の集中と熱練せば記憶力養成に利する所尠な

千讀マヌ
零讀マヌ
讀書家と藏書家

からざる可し、

第三節 書籍の購求

讀書家と裝飾家 書を讀むと書を購求するとは
全く別事なり、世には數千卷の書籍を書架に飾りて遂に其
百分一も讀まず否殆んど全く手を附けずして終るものあ
り、亦た一冊も購求するの養なきに關はらず、萬卷の書籍を
讀破せるものあり、前者は富豪の事なり、之れを裝飾道樂と
見ば必ずしも不可なかるべし、後者は貧者の事なり、購はん
と欲するも實に購ふの資力なきなり、若し幸ひにして前者
と後者とを連絡し、其前者の書籍を後者に流通し以て後

の窮を救ふを得んか單だに後者の便宜なるのみならず實に社會の利益なる可し、

余輩は爰に裝飾の爲めに備付く可き書籍の購求を説くものにあらず亦た貧しき讀書家に向つて書籍の購求を強ゆるものにあらず蓋し飾らんとする書籍は金を投ずるに於て容易に美裝のものを求め得べく讀まんとする書籍は圖書館の設備ある都會に向つては必ずしも購求の要なければなり故に只だ余輩の爰に一言せんとする所のものは資力豊かならずも尙讀書の必要に迫りて購求せんとするものに對して一片の注意を呈するに過ぎざるのみ、

書籍購求の注意(資力の乏しき人の爲めに)

其一、

書籍購求の注意

書籍購求に就て注意すべきもの三あり第一植字の正確にして脱落なき事第二價格の廉

なる事第三保存に適し取扱に簡便なる事之れなり、

第一、植字の正確にして脱落なき事

讀書家

の爲めにする書籍は植字の正確なるを以て第一とす誤植も時には前後の關係よりして推知し得ざるにあらざるも斯の如きは極めて熟達して後の事なり初級の讀書家が誤植の爲めに思想を混亂するの危険は甚だ恐る可きものなり殊に統計書數學書等の如き數字的説明に關する書籍の誤植は一寸の差千里に及ぶものにして老練家と雖も其誤

りを見出すの道なかる可し、近世活字の發明は益々誤植を多からしむるに至れり、故に植字の正確なる點よりすれば活字本よりも木版本の方が可なり、然れ共今の時に於て木版本を購は經濟上の點に於て甚だ不利なりとす、否な經濟上の不利は忍ぶ可しとするも、近來出版術發達の結果適者生存の理法に制せられて木版本の存立を困難ならしむるに至り、如何に求めんとするも或種のものを除きては到底購求の目的を達する能はざるに至れり、於是乎植字の正確は一に活字本に就て撰ばざるを得ざる事となりぬ、然らば此の活字本に就て如何に注意せば其正確なるものを求め

得べきかと云ふに第一は此點に就き信用ある出版屋を撰ぶにあり、第二は再版以後の書籍を求むるにあり、第三は先輩の讀みたる古本を求むるにあり、或る西洋の學者は曰く出版後一ケ年を経過せざる書籍は求む可からずと、如斯注意せば或は比較的正確なるものを求め得べきか、
第二◎價格の廉なる事 資力豊かならざる讀書家が僅少の資を投じて讀むに價する書籍を購求せんとす之れ頗る困事なりと雖も世は便宜なるものにて古本商あり、用財及豫約販賣法あり、請義鑑あり、以て不充分ながらも希望の幾分を達するを得せしむ、今之れ等の便宜なる方法に

就て少しく陳ぶる所あらんとす、

古本購求の注意如何 古本は總て一度藏書家の

手に在りたるものなり、藏書家は必ずしも讀書家ならざるを以て古本にも讀みたるものと然らざるものとあり、汚損せるものとせざるものとあり、中には一回だも其内容に觸れたるの形蹟なきものすらあり、若し斯の如き物ならんか全く新本と異なる所なきなり、而して古本と新本の代價を比較するに古本は概して新本の半額内外にあるが東京の相場なり、然れども古本の價は變動常なし、試験前に於ける試験委員の著述の如きは俄かに劇騰して新本と大差な

きに至る、然れども試験委員の著書必ずしも良著なるにあらず、只だ受験者の需用一時に増加せる結果として生起する一時的現象たるのみ、故に斯の如き時期に於て購求するは大に不利なり、若し強いて求むるの必要あらんか必ずしも試験委員の著述に限らざる可し、要は前項讀書の客體中に於て陳述せる書籍撰擇の標準に適應せるものならば可なり、古本には良著にして意外に安價なるものあり、吾人は新本に等しき根本通明氏の論語講義を二十五錢にて求めたる事あり、シジウキツク氏の倫理學史を十五錢にて求めたる事あり、斯の如きは甚だ稀なりと雖ども自ら足を運び

て古本屋搜索を初むるときは意外の所に意外の穢物あるは斯の道に經驗ある人の常に言ふ所なり、兎に角古本の價は流行の如何によりて常は上下するものなり、流行は常に新しきを逐ふて走るものにして其内容の良否は多く問ふ所にあらず、不朽の名著時に塵芥の中に埋もれて書店顧みず、世人顧みざるの風あり、眞の讀書家たるもの宜しく此邊に眼を注ぐ可し、然らば新書の刊行以内の代價にて良著を求むる事難きにあらざる可きなり、次に古本は傳染病菌附着の恐あるを以て危険なりと云ふものあり、之れ又た一應は顧慮せざる可からず、然れども

之れが爲めに古本は購求す可からずと云ふは不可なり、人の手に觸れたるもの危険なりとせば圖書館の書籍又た甚だ危険なり、否な新本とても決して此の危険を免かるべきにあらず、故に若し此の危険を恐れて書籍の購求を躊躇する時は遂に讀書するの期なきに至らん、誤れるも亦た甚だしからずや、傳染病菌附着の危険あらば宜しく此の危険を除去する方法を講ず可し、此の方法としては日光消毒大に可なり、若し表装の汚損を厭はずとせば蒸溜消毒又た可なり、古本に限らず新本も消毒するを可とす、斯く如く危険の豫防に出でずして徒らに古本危険なり求む可からずと

云ふは網を結ばずして魚を羨むの人と云ふ可し、
月賦及豫約購買の注意如何 已に出版済のものにして其聲價世に認められたるの書籍ならんか月賦購求大に可なり然れども未だ出版を完了せるにあらず其内容の良否亦た不明なる間に於て彼の瞞着的廣告に惑はされて月賦購入を初むるが如きは甚だ危険なるものなり世には猾商人多し資力なくして出版の業を営み先づ出版の資を得んが爲めに廣告を利用して世人を瞞着し完否未確定の間に於て月賦販賣若くは豫約出版を試みんとす而して其結果は如何んと云ふに第一回の拂込を拵めて其出版

は斷絶し後は顧みざるものあり幸にして其出版を完了し豫約を實行したりとするも其實廣告の萬分の一をも充たし能はざるを常とす故に月賦販賣法は甚だ便宜なるが如きも其實物が社會に評價せられざる間は甚だ危険なり豫約出版法は甚だ廉價なるが如きも結果は概して高價なりとす、

講義録購讀の注意如何

講義録は多くは月賦と豫約とを兼ねるものなり故に前述の注意は移して講義録にも適用する事を得るなり然れども講義録は概して數年來繰返し來れる事業なり内に學校を開きて直接學生に

講授し、外に校外生を求めて其校内の講義筆記を配たんとするなり、故に講義録は概して學校の副業なり、此の副業なる事は益々講義録の實質に聲價を副ふ蓋し副業としての講義録は總て講師が教場に於て學生に講授せし原稿の印刷若くは講述筆記なるを以て其内容は多くは責任ある學者の所説なるのみならず亦た講師に對しては講義に對する月謝を校内學生に課して仕拂ふの外別に講義録の原稿料を要せざるを以て經濟的基礎を強固にし代價を輕減して實質を整頓し得るの利あり、且又一面學校設備の事業に當る主任者は多くは信用ある紳士なるを以て其副業たる

講義録も亦た幾分公共的性質を有する點に於て彼の狡猾なる手段の下に豫約出版等を爲さんとする商人根性の比にあらず吾人は此の意味に於て信用ある學校の副業たる講義録購讀は尤に便宜にして實益あるものと云ふを憚らざるなり、若し夫れ彼の講義録を專業とする諸種の通信教授なるものに至つては多くは羊頭を懸けて狗肉を賣るものにして價格實質共不良不廉到底讀書家の一顧を價するものは尠かる可し、尙ほ講義録に就て一言す可き事あり、一講義録中には講ず可き科目頗る多く講師も概ね其科目によりて分擔を異に

するを以て講師に良否の差別ある如く、講義録中に於ても其科目によりては内容實質の良好なるものと不良なるものとの別あり、従て一講義録によりて完了せる種々の科目中には自然不必要なる部分を生ずるは止むを得ざる事なり、故に講義録が完了し分冊されて後新本又は古本として書店に出づるの日を俟ちて其内より最も良好なるものゝみを撰索し序々に必要なるものに就て購求する事は實に講義録購求の秘訣とも云ふ可き有利の手段なりとす、斯の如く分冊されたる講義録は著述に比し大に廉價なり、著書と同一の人が講述したる同科目同内容の講義録と雖と

も其代價は著書の半額を出でず尤も間には講義録は著書の如く整頓せざるものも之れありと雖ども之等は極めて僅少の差異のみ序文を附し目録を新にせる位にて眞の讀書家に取ては何等の痛傷なし、只だ機邊を飾らんとするものに取りては到底著書の右に出でざるや論を俟たず、
第三、保存に適し取扱に簡便なる事、讀みたる書籍は永く保存するの要あり、亦た書籍は藏するよりも讀むが主眼なるを以て携帯及取扱に簡便なる方可なり、彼の四六版二倍大にして一冊何千頁に亘るが如き大冊は多く辭書に於て見る所なれども斯の如きは携帯及取扱に不

便なるのみならず、保存に於ても取扱等の爲め其表装を破
る等の事尠からず、形は菊版を超えず、紙數は千頁以内のも
のにして、其紙質普通以上のものならんか、此の要求を充た
すに於て概して充分ならんか、次に洋装の書籍に上製と並
製とあり、上製は脊皮及クロスを用ゐる並製は洋紙の厚紙
を用ゐるを常とす、保存と取扱の便宜とよりすれば、並製の方
反て粗未なる上製より好適なり、殊に讀書する際に於ても
並製の方は綴目堅固にして破損するの氣遣少なし、若し夫
れ机邊を裝飾するの目的に出でんか、上製の可なるや云ふ
の要なし、

書籍購求を終るに望んで、一般に關する注意を附言せんと
す、書籍を購求せんとするものは、豫め解題書亦は各書店の
販賣書目録を取り寄するを可とす、東京の大なる古本屋に
は古本目録も調製しあり、之れによりて書名、著者、形體、頁數、
内容の概觀、代價等を調査して、後購求すべきは購書家殊に
地方にある購書家の忘る可らざる事項なりとす、

第四節 書籍の整理

書籍は目録を作りて整理するを可とす、而して此の目録は
藏書目録とするよりも寧ろ讀書の目録とするを可とせん、
藏書目録は自己の藏するものに限るを以て必ずしも讀み

たると否とを問はざるも讀書目錄は之れと聊か趣きを異にするものあり即ち讀書目錄は其藏書に係るものは勿論一回だも讀みたらん書籍は其借りて讀みたると圖書館にて讀みたるとを問はず總て記載するなり故に藏書も總て此内に包有すべく讀みたるもの若くは讀まんとする書籍も總て此内に記載し置く可きなり、此の目錄調製に就て注意す可きは第一に部門を別つ事なり、今吾人の調製せる讀書目錄に就て大別せる部門を示せば次の如し、

第一〇政治、經濟、及法律の部、政治學、政治史、法律學、法制史、經濟

學、經濟史、財政學、財政史、統計學、統計書等此内に列記す、

第二〇哲學、宗教、社會、倫理、教育に關する部、哲學概論、哲學史、美學論、心理學、教育學、教育史、倫理學、倫理學史、處世道德に關する雜著、宗教學、宗教史、社會學、文明史等は此内に列記す、

第三〇文學、小説、史傳、地理之部、修辭學、文法及東西古今の文章、雜筆、小説、史傳、地理等此内に列記す、

第四〇理化及數學の部、天文、地文、動植物、生理、理化、數學等此内に列記す、

第五〇辭書の部、普通辭典、專門辭典を記入す、

第六〇新聞雜誌の部、各種の新聞雜誌中にある重要なる事項

を記載す、
吾人の編成せる讀書目録は右の如し、人或は古書と新書、和製と洋製、日本文と外國文等の區別によりて整理するを可とすと謂ふものあれども斯の如きは藏書の形式的整頓即ち飾装に於てこそ適當ならんも讀書の経蹟を表章する讀書目録の部門としては當を得たるものにあらざるべし、次に讀書目録に記載する順序方法を示さん、先づ其順序は購求若くは讀書の暦年順によるを可とす、即ち借りたるものと購ひたるものと圖書館にて讀みたるものとに關はらず、同一部門の書は其購入借入讀み初めの暦日順に記載す

るなり、次に記入の方法は書名著者又は發行所頁數購入借入讀初め及讀了の年月日摘要等を記載し、尚ほ自己の藏書に係るものは藏書號をも記し置くを可とす、此の摘要中に記載する事項は内容の良否文體主眼等を最簡に摘記せば可ならん、讀書家の歴史は半ば讀書の歴史なり、彼等は讀書の内に善及讀書の内に樂しむのみならず、活動の原因も讀書に在り、敗の原因も讀書に在り、來る事多し、即ち讀書目録を作るは一面自己の歴史を作るなり、讀書家は此の準備なかる可からず、

第五節 讀書の注意

順風に帆を
舉ぐるには

其一、間口
を深く奥行
を深くせよ

讀書力を養成し、書籍を購入せば、讀書は即ち易々たらんのみ、然れ共乗るべき舟を有し、漕ぐ可き力あるもの必ずしも目的の港に達し得るとは限らず、船の取り方、航路の撰擇等、尙ほ注意すべき事項、尠ならず、讀書に就ての注意、亦たこれに異ならず、若し夫れ順風に帆を舉げ、力を勞する事少くして、目的の彼岸に達せんは、渡航家、讀書家の共に留意して止まざる所なりとす、以下之れ等の注意に就き、聊か述るゝあらすとす。

第一、**間口を廣く、奥行を深く**せよ、廣くして深からん事之れ、讀書の要訣なり、然れ共人間の精力と讀む

べき時間には限りありて、然かも其攻究すべき事項は廣く深く殆ど盡くる所なし、於是乎通常其一方に傾きて、或は廣きを主眼とするものあり、或は深きを主眼とするものあり、而て其廣きを主とするものは多くは、**淺瀬**に流て所謂間口八間と、**縛名**され、深きを主とするものは多くは、**獨**と走り、時に半狂と罵られ、井戸の鮒と賤しまるゝに至る之れ、讀書の注意を欠ぐものにあらずして、何ぞ吾人の考案を以てすれば、此の兩端を調和するの道あり、前に讀書力養成の條に於て、**繰述**せるが如く、哲學の概要を修むるは、其一方、**法**なり、**哲學**は間口も廣く、**奥行**も深し、亦法律學研究の例に於て

陳べたる如く、先づ入口を廣くし其深さの度を増加するに從て其廣さを減少し以て深さを増加するも亦た一方法なり大樹の峨然として高きは其基礎の強固なるが爲にあらすや、讀書は空中の樓閣にあらす基礎を廣くして其建設を高くし、間口を廣くして其奥行を深くする事之れ讀書の要道なり、

◎第一卒讀の價值如何 卒讀は大意を領するに適し、局部を連鎖するに妙なり亦た卒讀は時間を要する事比較的尠きを以て多讀を必要とする場合は自ら卒讀に傾かざるを得ず而して多讀は多くは廣く讀まんとするもの、取

る可き方法なるを以て卒讀は基礎的研究に向つて利する所大なり、尙ほ卒讀の有利なるは(一)全篇の要旨を捕へんとする場合(二)局部の旨を要せざる場合即ち部分の文義は明かなるも全篇の意義不明なる場合等なり故に新聞の如き雑誌の如き其他補助的参考書の如きは多くは卒讀に利あり然れども卒讀何等の意義を捕ふるなく雲烟朦朧の間に頁を繰るが如きは千百の讀書何等の用をなす能はず已に讀書と云ふ其意義を解せざる可からず即ち其意義を解する點に於ては卒讀熟讀共に異なる所なきなり只だ其解すべき範圍が細部の枝葉に亘らずして主要の根幹に止ま

るもの之れを卒讀と云ふ讀んで解する所なきは殆ど讀書
にあらざるなり。

第三、主要なる根幹は何れにありや 近世に於

ける學術は多くは秩序的組織的に説明せらるゝを例とす
初めに通論なるものを置いて一般に通じたる概念を明に
し、以て其學科の意義他の學術との關係成立及發達の狀況
攻究す可き範圍及攻究の方法等を示し、次に各論に於て其
攻究範圍を分類し、枝より枝に入り葉より葉に亘りて深く
細部を論究す、故に斯の如き秩序整然たる著述は讀んで其
大要を捕捉する亦た難からず、例へば其學問が果して如何

なるものたるやは其定義を解説せる最初の一章を讀むに
於て其概念を了するを得べし、主要なる根幹は即ち之れな
り、次に其根底は何れに伸び何れに廣がるや、之れ他の學科
との關係を説明せる一章に於て其大要を了するを得べし、
次に其根幹は何れより來りて何れに向ふや、之れ其成立と
發達の狀況を説述せる一章に於て概ね明なりとす、次に
幹と枝及枝と枝との關係、枝と葉及葉と葉との關係、其他枝
葉の構造性質等皆な各其相當せる部門の章節に於て夫れ
それ概観し得るものとす、而て其各章の主幹亦た其全文の
各所に四離飛散するものに非ず、其要を辿りて之れを節約

すれば、其中樞は恰かも星光の如く、一點に集まる。此の星光を捕ふるは即ち讀書の要訣なり。然らば其星光を辿り、其主眼を捕ふる法如何。

第四◎章節の主眼を捕ふるの法如何。之れ讀書の熟練に待つ可き問題にして、一片の筆長く之れを律すべきにあらずと雖も、其章節を一氣呵成に讀破するときは、一道の光明其間に起り、星光の中心は自ら其眼裡に影す可し。此の瞬間を逸せず、色鉛筆等を取りて其主要部に圈點を附し、或は書籍の上部に註記し、或は簿冊に適録し、以て此の部分に再讀三讀するときは、其章節の眞義了然として明か

なる可し、活眼活書を讀むとは即ち此謂なり。斯の如くして全般を通讀し、全部の眼目を捕捉せば、爰に全篇に對する圖解を試むるも亦た可なり。

第五◎圖解の要。以上の如くして作成せる要點の圖解は所謂學問の縮圖なり。壓搾せる智識なり、之れを通覽するときは全篇の主要瞬間にして、腦裡に影す。試験前の學生多く此方法又は之に類したる方法を取る。蓋し斯の如くする時は通覽最も便にして記憶甚だ容易なるのみならず、僅少なる時間に於て再三其全篇を繰返し得べければなり。

第六◎讀書の段階

普通の學術に關する書籍は文

初
卒

句の解義多くは容易なりと雖も全篇の眞義概して難解なるを常とす故に此種の讀書に向つては初讀は多くは卒讀を利ありとす即ち卒讀して臆るげにも其全般の大意を解するに努む可し次に再讀に於ては可成著者の意見に服從して綿密に細部迄攻究し尙ほ之れか記憶に努む可きなり次に第三讀に於ては宜しく自己の見識を用ゐる種々の疑問を提起し以て著者の立論を吟味し考査すべきなり著者萬能の神にあらず何んぞ過誤なきを得んや立論不正確ならば必ずしも服從の要なし即ち第三讀以後は批評的眼光を以て書籍に向はざる可からず然れどもこは之れ充分

其七、熟讀玩味を要する書籍

の讀書力ある人に向つて云ふ可き事なり讀書力養成充分ならざるものは再讀三讀して辛ふじて此の第一讀の程度に達す可きなり五讀十讀して初めて第二讀に達し讀書百遍にして尙ほ批評眼を活らかし得ざる位なる可し要は讀書の回数にあらずして讀書の段階に對する要件の充足にありとす

第七、熟讀玩味の價值

以上主として組織體を

なせる科學其他の智識に關する近來の著述に就て讀書の注意を促がせり然れども或種類の書籍は直に右の法則を適用し難きものあり例へば宗教上道德上の訓言の如き幽

玄にして意義深遠なるもの或は古文等の如き難解佶屈なるもの或は詩歌等の如き美的觀念に訴ふ可きもの或は全篇の大意を解するの必要なくして寧ろ句々味ふ可きもの等は概して卒讀を許さざる性質のものにして熟讀玩味するに於て初めて其妙味を解し得べきなり、論語の如きバイブルの如き佛典の如き、ニーチェのツアラトウストラの如き萬葉集の如き易詩春秋等の如き即ち其一例なり、

第八著者及時代研究の爲めにする讀書

詩歌右文藝訓等は熟讀玩味すべきものにして卒讀を許さざる事前述せる所の如しと雖も之れ等の書籍により著者

或は時代の研究を試みんとするに於ては句々を玩味すると同時に亦た全篇の主要點を捕捉して之れを解剖し以て組織的整理を爲すの要あり故に斯の如き場合に於ては此種の書籍と雖も亦た遂に卒讀大意を了し思想の眼目を捕捉して局部を連鎖するの利益を放棄する能はざるなり、

第五章 讀書の效果 (緒論)

吾人は今や讀書の主體、客體方法に就て其概要を攻究し終れるを以て先づ爰に是迄縷述せる所を概括せんとす、

以上の概括 吾人は(一)緒論に於て先づ智識の必要

を陳べ此の智識は讀書によりて初めて充分に開發し得らるべきを明にし次に讀書を定義して著者の思想を其著書によりて理解するにありとし而して讀書の成立要件を分解して讀書の主體客體方法効果の四となし此の順序に従ひて讀書に關する諸問題を論究せり即ち(二)讀書の主體に於ては文明國の書籍が最も讀書の必要に迫り居ること讀書嫌ひの故を以て讀書を躊躇するが如きは不可なること嫌ひなることも屢々繼續して反撥實行するときは知らず(一)の間は讀書の趣味を感受するに至り之れが第二の天性となるが常なるを以て讀書の良習慣を養成するは必要

なること等を陳べ轉じて(三)讀書の客體に於て書籍濫造の弊を説き此弊の除去する爲め書籍の撰擇に注意するの必要なることを明にし續いて其撰擇の標準を示し古書と新書との價值を決定し以て善良なる書籍は將さに如何なるものたるべきかを説き更らに(四)讀書の方法に於て讀書の第一義は著者の思想を誤らずに其著を理會するにありとして其理會の資料となるべき著者の人格境遇時代等を知るの必要を陳べ次に讀書の準備的作業とも云ふ可き讀書力の養成書籍の購求及整理に就て稍や詳細の説明を下し最後に讀書の注意數件を開陳して讀書の方法を終へた

り即ち如何なる人が如何なる書籍を如何にして讀む可き
やは之れにて全く陳べ終れり唯だ殘る所は其最良なる書
籍に對し最良なる方法によりて爲されたる讀書は將に
如何なる効果を生すべきや即ち讀書の効果に就ての問題
なりとす、

讀書の效果と讀書の目的

讀書の效果は多く
は其目的の如何によりて異なるものなり讀書の目的に種
々あり或は利用を目的として讀書するものあり法律家が
法律の解釋適用等の爲めにする讀書新刊批評家の新刊書
に對する讀書商業家の物價統計書に對する讀書等の職業

上よりするもの及試験前に於ける學生の讀書等之に屬す
或は快樂を目的として讀書するものあり娛樂として小説
を讀み詩歌を讀み文學上の雜筆を讀む等の類之れなり或
は單に修養を目的とするものあり自修の爲めにする讀書
課業とする學生の讀書等の如き之れなり或は何等差當り
たる目的の爲にあらす自己の習僻として讀書する者あり
所謂讀書家學究家の讀書は多くは之なり讀書の目的と其
効果とは或點に於て一致するものなり蓋し目的は到達前
に見たる効果にして効果は目的の實現せられたるものに
外ならざればなり故に其目的の異なるに從て讀書の效果

亦た各々異なるものあり即ち法律家新刊批評家商人等の
讀書は各其職務の執行と事業の進捗等に資す可き効果を
現はし試験前の讀書は及第なる効果を齎し以て利用の目
的を實現するの期あるべく亦た娛樂の爲めにするもの修
養の爲めにするもの等皆な各々其目的とする所に到達し
て夫々豫期したる効果の幾分を發揮し得べきなり然れど
も讀書より生ずる効果は單に目的としたる範圍に止まる
ものにあらず寧ろ其目的とする所は實現せらるゝに至ら
ずして反て豫期せざる効果を齎らすを常とす例へば試験
前の讀書は及第なる効果を現はさずして止み快樂の爲め

にする讀書反て苦痛を齎らすに關はらず他の意外なる方
面に於て讀書の眞價を發揮するを常とす讀書の効果とし
て吾人が今攻究せんとする所亦た爰にあり即ち個々の目
的に對して生ずべき豫想せる効果は今吾人の問ふ所にあ
らず讀書の目的が其何れに在るに關はらず讀書其物の價
値といつて一般に現はるべき効果に就き少しく陳ぶる所あ
らんとす。
一◎一般◎に◎現◎は◎る◎べ◎き◎讀◎書◎の◎効◎果◎ 讀書其物の
効果が豫期せずして現はるゝは恰かも遊戯が快樂として
の外何等の意義なくして健康に利する所あるにも比すべ

きか今此の豫期せずして自ら現はれ来るべき讀書の効果を擧げんか第一智識を開發し識見を擴張するにあり第二精神を修養し人格を高尙ならしむるにあり第三讀書の趣味を養ひ快樂を感受するにあり

第一智識を開發し識見を擴張す

凡そあらゆる人智の發展に伴ふて現出せる百般の學問は書籍によりて世より世に傳へ人より人に傳えらるるれば如何なる種類の書籍によりて如何なる目的の爲めにする讀書と雖も讀んで書籍を解いたらんものは必ずや幾分の智識を開發し識見を擴張する所なきはあらざるべし娛樂の爲めに

する讀書も利用の爲めにする讀書も修養の爲めにする讀書も己に讀書なる以上は其目的を達せんとする以前に於て書籍の内容を理會せざる可からず理會せらるべき書籍の内容は即ち或種の智識なり此の智識を理會するに於て初めて其目的を達するの因をなすものなり彼の娛樂の爲めにする詩歌小説の如きものすら其快感に訴ふる以前は理會にあり即ち理會せられたる印象が情緒に觸接し以て一種の快感を惹起するものなり其他如何なる讀書にせよ知識を擴張するの效果は其目的として期待せると否とに關はらず必ず讀書に伴ふべき要件なりとす前述の如く知

の擴張が必ず讀書に伴ふものとすれば、讀書の利益は只だ此の一點に於ても已に充分なりとす。蓋し智識は人間に行く可き道を教へ依るべき理想を語るものにして、人間處生の針を指示する羅針盤たると同時に生活上の基礎を明にする燈明臺とも云ふべきものなればなり。然れ共讀書の効益は單に之れのみに限らず、尙ほ高尚にして偉大なる効果を齎す事之れ次に陳べんとする所なりとす。

第一精神を修養し、人格を高尚ならしむ。

智識を開發し、識見を擴張するは讀書直接の效果なりとすれば、精神を修養し、人格を高尚ならしむるは正に具間接の

効果とも云ふ可きか。蓋し人格の完成は智識の興へたる光明に照らすによりて益々貴とさを得べく、人格の内容たるべき行為は智識の指定せる軌道を辿るに於て愈々價值あるべければなり。語を換えて謂えば、智と行とは殆んど合一せんとするの傾向を有し、而して智は多くの場合に於て行の因となり、行又概して智の結果として現出するの傾向あり。故に讀書より生ずる効果を其發生の順序より曰えば、智識の開發、識見の擴張は最も初めに於て發生すべき効果にして、精神の修養、人格の完成は其結果として現出する。第二の效果也とす。然るに古來知行の關聯を否認する學者あり、

彼の有名なる厭世哲學者ジョーベンハウエル氏の如きも
其一人なり曰く「智識は實行に影響せず亦た人格を高尙な
らしめ得べきものにあらず之れ美學を研究せるものが詩
人たり美術家たり能はざるを見ても知るべきなり」と成る
程智識を得たるもの必ずしも直ちに實行家と爲り得たる
ものにあらざる點は吾人も亦た等しく認むる所なり然れ
ども讀書を爲し智識を開發するの一事は直ちに實行家と
爲り得たるにはあらずとするも之れを知ると云ふは遂に
之れを行ふの階段に登るの第一歩と云ふを得ざるか其識
見を擴張するは將來高尙なる人格を形成し活動的人物と

知行合一を
是認する學
者

なるの基礎なりと謂ふを得ざるか例へば某の事は善なり
某の事は惡なりと知りたらんには其惡は避けて其善に向
ふが人間の常徑なりと謂ふを得ざるか今假りに現今實際
の社會は時に之れと異なりたる現象を呈し知りつゝ惡事
を働くものありとするも斯の如きは變則的一時的の現象
に過ぎざるべし知と行とが密接なる關係を有する事は古
來幾多の學者によりて洞察されたり王陽明然りソクラテ
ス然りアリストートル然り今ア氏の言を借りて曰えは「學
問の目的は單に知識を興ふるの一事に止まらず其智識を
實行上に價值あらしめんが爲めに外ならざるなり」ソ氏の

言を借りて曰えは「人の不善を行ふは眞は善の何物たるを知らざるに因るなり」尙ほ王氏の言を借りて曰えは「智識は自ら之れを行ひ得るに至りて初めて學知せりと謂ふべきなり、弓を張り矢を狭み引滿して的中つ斯の如くにして初めて射を學べりと云ふべし、知の眞切篤實の所は即ち行なり、行の明覺精察なる所は即ち之れ知なり」是等の言主として道德上の知行に關するものなりと雖も、兎に角善良なる讀書によりて得たる智識が直接間接に實際世活の上に効果を及ぼし、其高尚なる智識が高尚なる人格を養成するの因をなす事は争ふ可からざる事實なりとす、

讀書は精神の修養に價値あり

小説を讀む心の數々

以上は主として讀書が實行上に及ぼす効果なり、然るに讀書の効果は尙ほ之れに止まらず、所謂精神の修養に資する所尠からず、彼の釋迦、キリストの聖訓、孔子の論語を初め、學徳並び備はれる古聖賢の著作及近代に於て最も進歩せる哲學、倫理學等を讀みて、良く之れを解したるものは必ずや心中謂ふ可からざる壯快を覺え、確固たる信念の胸裡に躍如するを禁じ能はざるべし、然れども書は其解し様によりて如何なる意味にも受取れるものなり、即ち同一の書と雖も、讀む人の心如何によりては、人毎に異なりたる世界を現出し、異なりたる印象を享受す

るものなり、或は小説を讀みて、八世を達観する偉人もあるべく、或は之を讀みて、謀反を企つる賊子もあるべく、或は醜行を敢てするもの、或は笑ふもの、或は泣くもの、或は罪を犯すもの、或は善行を爲すもの、等種々様々なるべし、然れども人若し小説を讀みて、悪影響を受けたりとせば、それは小説其物の罪にあらずして、讀む人の心即ち其根本に於て誤る所あるに基因す、人多くは、枝葉の痛傷のみを見るに急にして、根幹の良質を知るの力乏しく、部分の醜に蔽はれて、全體の美を索るの能なし、而して曰く、小説は害あり、讀む可からずと、何ぞ小説に害ありとのみ云ふを得んや、小説に限らず如

小説其物に
は害なし
心(讀む人の
心に害あり

弊害を排除
するの法

何なる種類の書籍にても、讀む人の心如何によりては、人格の養成精神の修養は愚か、反て之を傷つくる者もあるべく、聊か讀書の効果の充分ならざるが如き感あるは甚だ遺憾とする所なれども、こは讀む人の心懸け如何によりて必ず除去し得べき一部の弊害にして、是を以て直ちに讀書の効益を否認するが如きは決して當を得たるものにあらず、宜しく其弊害を排除して、益々讀書の價値を發揮せしめ、以て充分の効果を修むるに努むべきなり、然らば其弊害を排除するの法如何、曰く(一)善良なる書籍を撰擇すること(二)充分に讀書力を養成すること(三)讀書の方法を誤らざる(四)確

固たる目的を定めて讀むこと之れなり然るに前三項に就ては已に説明せる所なるを以て爰には専ら讀書の目的に就て一言する所あらんとす、
凡そ目的を定むるには(イ其價値の最も偉大なること)(ロ之れを實現し得るものたること)の二點に着眼するを良しとす、
目的は實行の據るべき標準なり、指導者なり、此の指導者にして拙劣無價値ならんか、何んぞ實行の完きを得んや、只だに完きを得ざるのみならず恰かも暗夜に道を迷ふにも等しく、其實行の結果は全く失敗に終るや知るべきなり、次に目的は到達すべき標的なり、實現し得べき理想なり、此の

理想にして實現し得ざるものならんが之れ理想にあらずして空想なり、空想は恰かも夢想の如く、空中の樓閣にも等しく、變現極まりなきものにして、到底理想とするの價値なし、
今讀書に就て考ふるに、讀書の價値は人格を向上せしむるの點に於て最も偉大にして、亦た讀書によりて人格を向上せしむるは必ずしも難きにあらざるが如し、即ち人格の向上は讀書の價値として現はる、最も偉大なるものにして、同時に亦た讀書によりて必ず實現し得らる、ものにして、讀書の目的を此點に樹立するは頗る當を得たるものと思ふ、
然らば人格の向上とは抑も如何なるものか、

人格なる語は學者によりて其解義を異にするものありと雖も今是等を穿索せんは吾人の本意にあらず爰に所謂人格の向上とは自我と社會我とを調和し現實と理想とを結合せしめ得る底の完全なる人物に近似するを云ふ之れを倫理學者の言に借りて謂へば自我實現主義活動主義精力主義等に包容せらるべきものにして自己の努力によりて完全なる人物に近似するもの之れを人格の向上とは云ふなり故に讀書の目的は完全なる人物に近似するにあり即ち人格の向上人格の完成にあり讀書の結果は此の目的を實現するに於て初めて完きを得べきか

其三、讀書の趣味

快樂の性質

第三、讀書は趣味を養ひ快樂を感受す。快樂は寧ろ求めて得べき者にあらずして何等かの作業に伴ふて自ら來るべき副産物なり若し快樂を目的として讀書せんにには恐らく其効果の大半を滅殺するのみならず豫期したる十分の一だも其快樂に接する能はざるべし快樂を求めんとして徒らに之れを追ふは怡かも月夜に自己の影を追ふが如く一步進めば一步遠ざかり走るも止るも遂に手を接するの期は無かるべし故に若し讀書にして快樂を享受するの効果を伴ふものとせばそは目的として追求せるの結果にあらずして讀書なる作業に伴ふて自ら生起する

か
の
趣
味
は
不
快
樂
な
ら
ず
也

副産物なりと云ふを當れりとせん、然れども月に趣味あるもの初めて月に樂み花に趣味あるもの獨り花と友なり、讀書に快樂の伴隨し來るは讀書に趣味を有するの結果にして、讀書に趣味を有せざるの人即ち讀書が苦痛たるの人に取りては、只だに快樂の伴はざるのみならず、反て苦痛を伴ふを常とす、蓋し快樂は事業に趣味を有するもの、手上にのみ落下すればなり、趣味は本來先天的に存在するものあり、或は自ら養成して後發生するものあり、是れ本來讀書癖の人と讀書嫌ひの人ある所以なり、本來讀書癖の人は讀書即ち趣味なり、快樂な

り、讀書せざること反て苦痛なり、此の種の人は常に初めより讀書の快樂を享受すれども、本來讀書嫌ひの人は其初めは極めて苦痛なるべし、然れども趣味は後天的に養成し得べし、苦痛も之れを屢々するときは次第に苦痛を感ぜざるに至る、之れ習慣が第二の天性を産めるなり、即ち趣味が後天的に發生せるなり、人多くは讀書嫌ひの故を以て書籍に遠ざかり、時に必要に應じて書籍を手にするれども、苦痛に堪へずして之れを投棄し、而して曰く、讀書は我れの性僻にあらずと、遂に全く書に接せざるに至る、斯の如くにして世に何事をか爲し得べけんや、蓋し人間の業務は多くは最初

初苦

苦痛に打勝つ
の習慣

讀書の苦痛
を除去する
方法

苦痛なり此の苦痛に打勝つの人良く成功するを得べし彼等は何故に成功するや苦痛に打勝つ習慣を得るの結果業務に快感を伴へばなり總ての業務此の域に達せんか人は新たに翼を得たるにも等しく益々登りて益々高く愈々努めて愈々快ならん要するに快樂は努力の上は咲く美花なり業務の成果より發する香氣なり此の美花を望まんとするものは努力せよ此の美香に接せんとするものは業務に忠なれ然らば快樂は求めずして自ら來らん若し夫れ讀書を苦痛なりとして之れを放棄するものあらんか試みに暫時忍耐し努力して讀書せよ而して其苦痛を

卒讀

早く

反復繼續して第二の天性たる良習慣を作るべし然らば苦痛は何時か消散し去つて趣味湧き快感躍り遂に止めんとして止め能はず罷むるが反て苦痛なるに至るべし讀書も爰に至れば崇高なる趣味なり純潔なる快樂なり月なり花なり今や時正に燈火親むべきの好期誰れか來つて此の樂園に崇高純潔なる讀書の快感を貪ぼらざる者ぞ刪除するを可とす

讀書力の養成終

明治四十二年一月十一日印刷
明治四十二年一月十五日發行

讀書力の養成
一定價金三十五錢

著作
所有

校訂者

大町桂月
横田章

發行者

大倉廣三郎
東京市京橋區南橫町十八番地

印刷人

渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

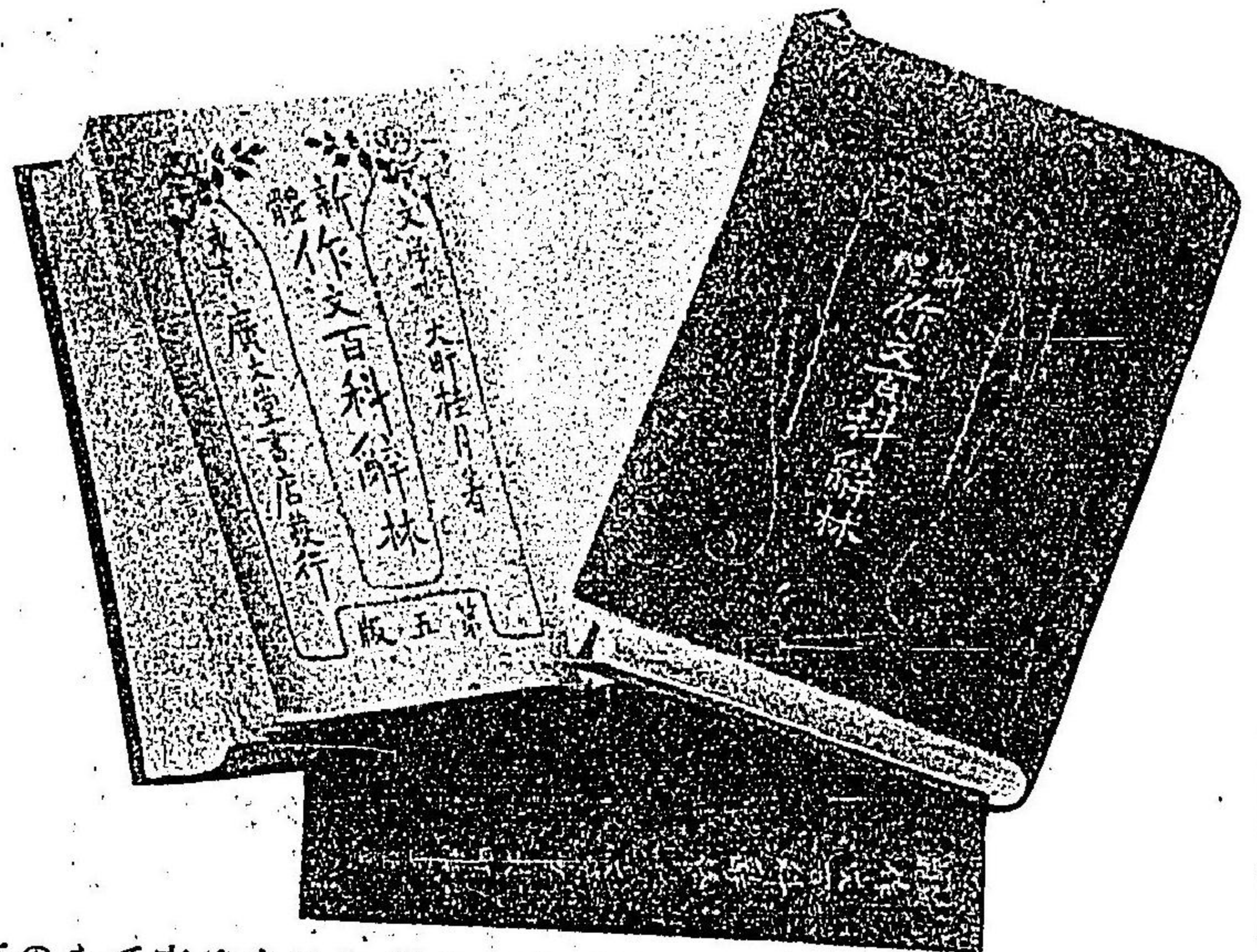
印刷所

日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京市京橋區南橫町十八番地
廣文堂書店
振替貯金第四六八四番

文學士 大町桂月先生著



新作文百科辭林

好評十三版全一冊

◎定價金壹圓二拾錢
◎郵税金十二錢

◎洋裝四六判クロース綴金文字入
◎舶來紙美製紙數八百五十頁

初學文を學ばむとするの士にして困難を感ずるは言ひあらはし方を知らぬことなり。例へば山を形容せんとして形容する詞を知らず、海を形容せんとして形容する詞を知らず、意餘り有りて詞足らず、文に成らず、之を助けんとて世に熟語熟句を集めたるの書多けれども大抵は古文の熟語熟句を採れるものにて、範圍も廣からず、今の實用に適せず、文を學ぶもの、大に遺憾とする所なり、當代能文家の密に適する熟語熟句を網羅し一々和歌漢詩俳句を添へ自然人工、人事、文範、の四編に分ちて作文上あらゆる種類を包含して眞に作文百科の名に負かず且つ文範には普通文の模範となるべき古今の名文を選びて一々之に批評を附せられたれば、此書は今の作文を學ぶの士の最高の指南なり、文を學ばんとするの士、一たび此書を手に入れば意到り筆隨ひ縦横自在筆端毫も窮束せざるに至らむ。

文學博士 三宅米吉先生序
和歌山縣師範學校教諭 橋本常彦先生著

修身講話最適當書

偉人品性の修養

大和綴菊版全一冊優美高尚
口繪寫眞版及木版畫六葉挿入
正價金五十錢 郵税金六錢

抑も偉人の傳記逸事は從來修身講話の主要材料として用ひられたるものにして其感化力の有力なるは固より言を待たず、然し其材料の撰擇の如何にて感化の深淺強弱の差あるを免れず、橋本先生永く學生薰陶の任に當り日常品性陶冶の方法に付つて苦心せられ、鑄居中の菅公、復讐後の赤穂義士、爲人としての中江藤樹の三大講話を事實の誤り無らしめんため古蹟遺物著書詩歌を搜索して學生薰陶者のために大に盡されんため茲に本書を公にせらる。

文學士 大町桂月先生著

筆

洋裝美製 ◎定價金四十錢
全一冊 ◎郵税金六錢

桂月先生の筆は天下一品と稱せらる雄壯華麗の域を經來つて、高古平淡の域に至る、而かも筆底に涙あり筆端に熱血迸る、霸氣ありて街氣なく逸氣ありて誇氣無し縱橫奔放にして格を外れず、神韻縹緲として天馬空を行くの概あり、此書は實に先生が近作にして佳の佳なる者粹の粹なる者採れる者なり。

文學士 大町桂月先生著

半生の文章

洋裝美製 ●定價金參拾五錢
全一冊 ●郵税金 六錢

天下苟くも文字を知る者は、桂月先生の文名を知らざる者無し、匠氣なく銜氣なく、人格文章相合して渾然として玉の如く、實に文才を超越したる大才、其の精粹集つてこの巻に在り。論や、諤々、説や、諄々事を記しては、真相躍出し感を攄べては、眞情人を刺す、之れ天下の逸品一代の名著なり。

大審院長 法學博士 横田國臣先生著

獨庵哲論

洋裝美製 ●定價金五十錢
全一冊 ●郵税金 六錢

横田獨庵先生從來法律研究に熱中し、第一期、法律哲學第二期、政略哲學第三期、靈魂哲學第四期、觀察哲學を發表せらるる本書は以上四編より成れるもの也、先生の此發明哲學は如何に人生を刺戟するか縊き以て其奧義を問ひ研究の資料とせらるべし。

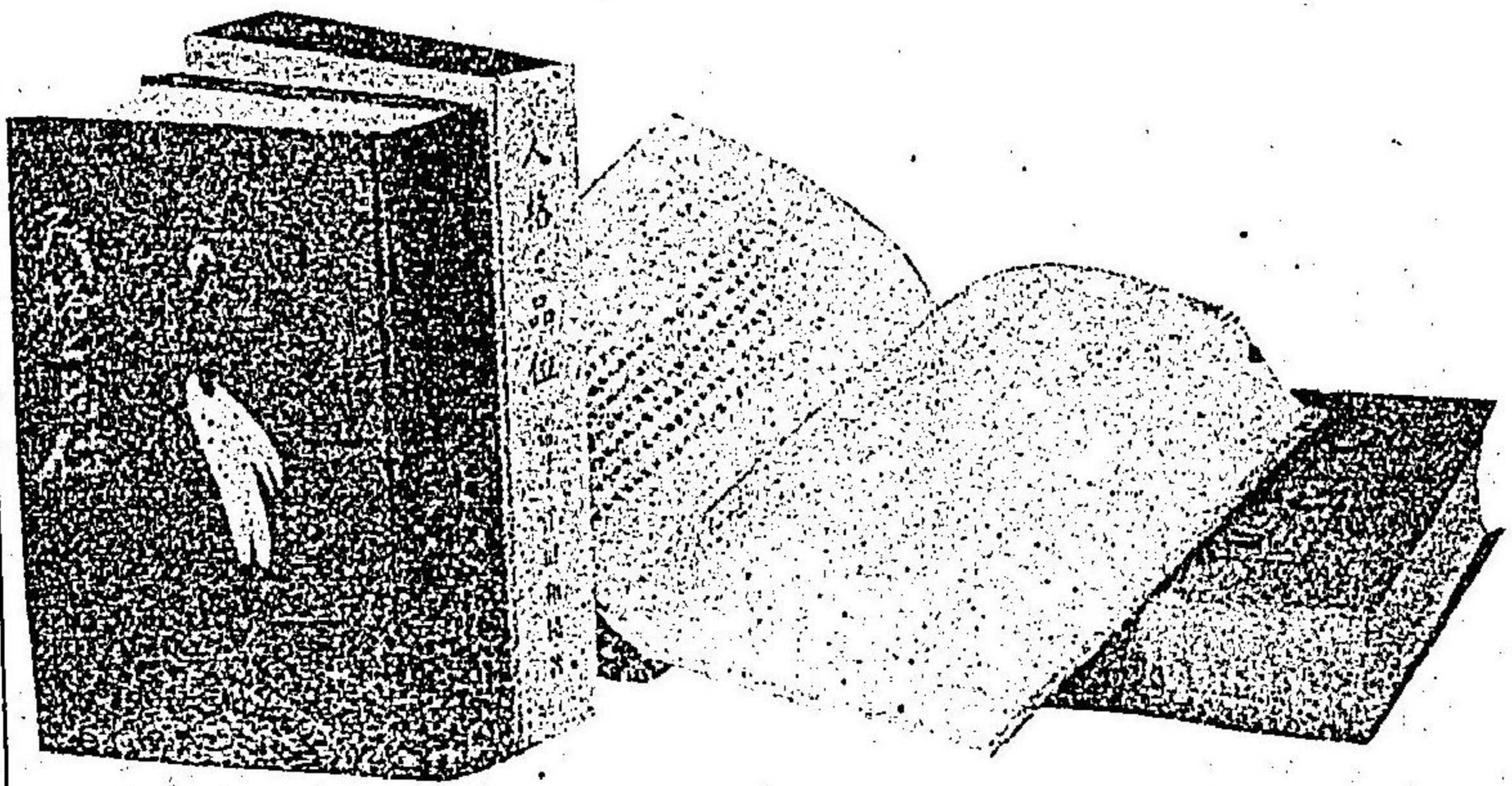
人格と品位

洋布函入美製 六百五十頁
金一圓三十錢 郵税十二錢

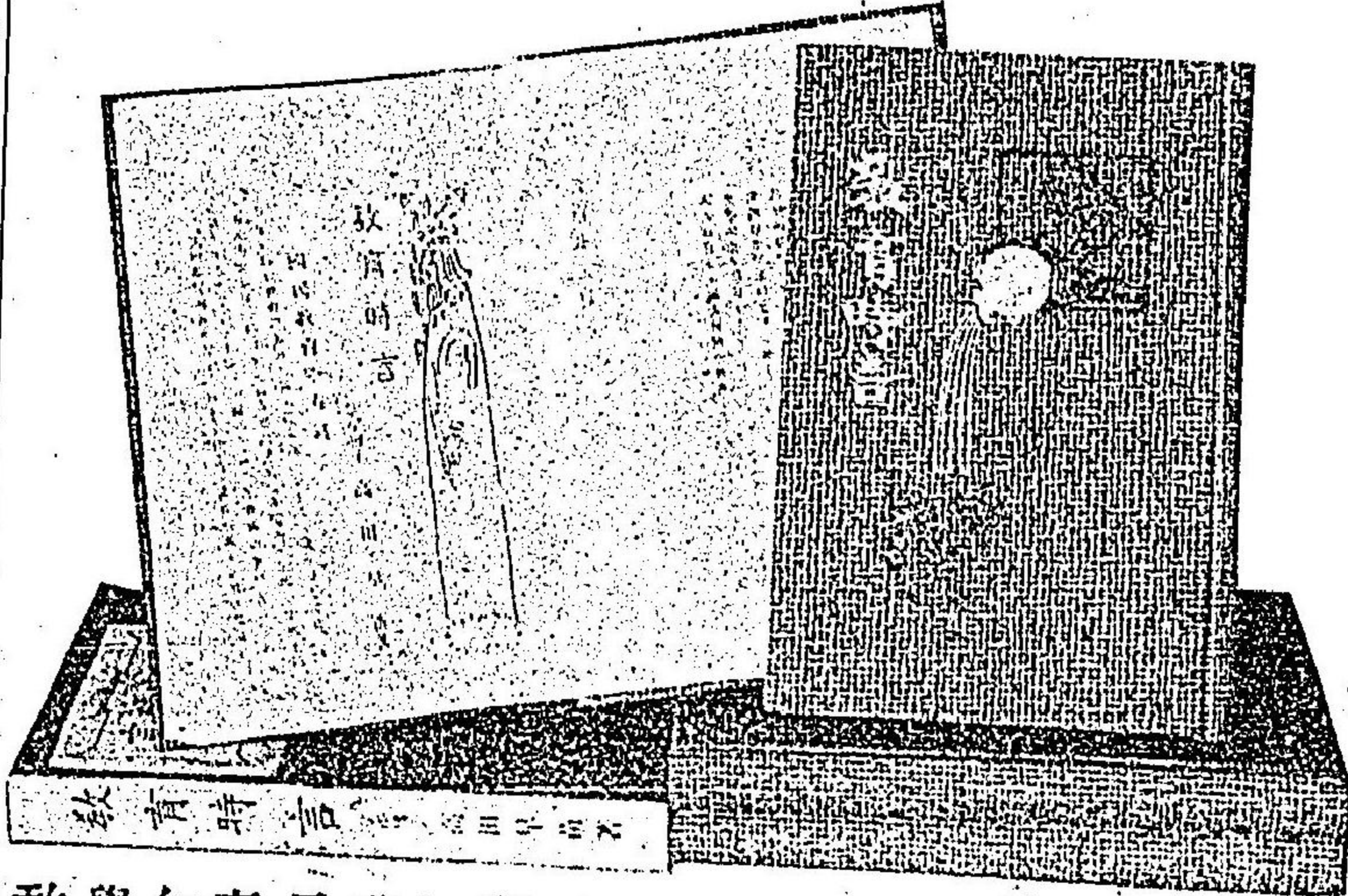
人格卑く品位なくんば、人は到底社會の水線上に立つ能はず。されば何人と雖も人格を高潔にし、品位を高めんとするの修養は最も肝要なるや論なし。茲に於てか社會の先覺、後進の師表たる可き人の意見は、片言隻語と雖猶且萬金よりも貴しとし、世人の等しく渴望する所なるべし。
本書は浮田博士が早稻田大學講師として現在及過去に通じて數萬の子弟を訓育せらるるに人格と品位を高尙ならしめんため、倫理道德眞理の修養上に緊要なる點を各方面より説かれたる一大雄篇なり。
されば、身の修養をはかるもの、國民道德の頹敗を憂ふるものは勿論、大方の士女よ乞ふらくは一本を座右に備へられよ、是れ當に一身一家の爲めのみにはあらざるべし。

著生先民和田浮

早稲田大學 法學博士 浮田和民先生著



早稲田大學博士 高田早苗先生著



教育時言

洋布函入美製四六判全一冊
定價金壹圓 郵税八錢

舊思想の教育方針は社會の廢物となり、今や歐米最新思潮教育法は益々行はれんとす、然れ共我邦の習慣、其他の事情に於て其儘に用ひ得ざる點尠少からず、本書は我邦一大學園の經營者、及學長として命名高き高田博士が、將來の教育方針及教育家の責任、義務、學生訓育の方法に關し論せられたる一大名篇也

苟くも新時代に於ける教育の傾向、及び其長所短所を知らんとするもの國家の榮枯盛衰と教育との如何に密接なる關係あるかを知らんとするものは識者、爲政者、教育家、學生は元より國民一般に必讀すべき著也。敢て薦之。

帝國法科大學教授 法學博士 戶水寬人先生著 紙數三百八十頁

德育と學藝

洋布函入美本 定價金九十五錢
四六判全一冊 郵税金八錢

古往今來、道德頹敗の嘆聲なき世に稀有の事なりと雖も、我國方今は社會の各級に涉りて道儀の觀念、あはや地を拂はんとす殊に社會の中樞たる、現代青年の思想に不健全の來さんとするは看過すべからざる重要問題なり。本書は現代最高學府の教授にして將又當代知名の大家たる、戶水博士が此等の流弊を救治せんため、倫理道德教育政治文藝の各方面より德育及智育の養成を説かれたるもの也。されば身の修養を計る一般人士は勿論教育家宗教家爲政者は必讀すべき一大著述なり。殊に方今青年諸君が緝くときは身に裨益する所甚だ多かるべし。

伯 大隈重信閣下序 好評嘖々
蘭 國通信員 第三版出來
哲 學博士 德ネカムプ氏挨拶
外國語學會主 千葉秀浦先生著

外人の觀たる日本

新形頗美本 定價金一圓
菊版全一冊 郵税金八錢

世界の樂園としての我國を觀光の外人は如何に觀つゝあるか又如何なる者が土産談となるか我邦の美點は如何に紹介せられつゝあると共に、短所も又世界に紹介せらるゝは勿論也。一時歐米に其名を轟かせしV氏一度觀光の途に上り横濱灣頭より目に見へたる短所を一一時批評せらる。本邦人にて向上の念あり又發展を計る者、其他一般人士にても聞くに足る論評尠少ならざるべし。敢て之を薦む

大審院長 法學博士 横田國臣先生著

宇宙根本問題

製本洋布美麗 定價金五十錢
四六判全一冊 郵送料金六錢

横田博士は我邦の司法を總轄するの要職にあり。居常世故人情を達觀して大に悟らるゝ所あり、曩には觀察哲學、靈魂哲學、法律哲學、宗教改良論を著して處見を公にせられしが今や進んで宇宙の何たるかを追究せんことに腐心せられ、該博の知識を利用して暇あれば之を研鑽せられ、茲に漸やく公にせらるゝに至れり。書中先づ、觀察の研究如何、眞理とは何ぞやより説き起し宇宙果して始めあるか、宇宙果して限あるか、世界創設如何を詳解し、更に人類進歩の趨勢、法律將來の傾向を、最後に『法學の如きは將來如何なる方針に向つて進行す可か又進行せしめざる可からざるか學者と實際家の抱負如何』に到るまで附加して論評せられたり。本書世に出て將來世道人心に裨益する所蓋し鮮少ならず。

文學博士 大槻文彦先生著

復軒雜纂

洋布美製 定價金壹圓六拾錢
全一冊 郵税金拾二錢

我邦の文運日に月に駁々乎として隆盛に赴くと同時に博士學士も亦雲の如し然るに此濟々たる多士の中に和漢洋の學に精通せし文士果して幾人かある歟へ來たれば寥々曉星も雷ならず僅に一人り大槻文學博士あるのみ之れ博士が世に推重せらるゝ所以なり抑博士が學識の深遠宏博なるは世既に定論あれば今喋々を要せず乃祖の洋學を受け乃父の漢學を受け更に自つから國學を修められて文學の上に於て大成せられしは既刊の言海文典等に於て夙く世人の認むる所なるも此雜纂を一たび播かるゝに至らば更に眞の文學博士と言ふ稱に適するを知られん他の文學一部分博士とは日を同ふして談ずべきにあらず然して此雜纂中に收むる所の文章は博士が多年記述せられし所のものにして事は内外古今に涉り一として昆玉ならざるはなし其内容に至りては片言隻語の能く盡すへきにあらず乞ふ試に一たび播かれよ文壇上更に光彩の陸離たるを認められん

信夫恕軒先生著 改版第三十版

赤穂義士實談

洋裝美製 定價金五拾五錢
菊版全一冊 郵税金 八錢

義士の實歴は幾卷の書冊を以てするも興味盡すべからず、信夫恕軒翁は漢學者中の奇人にして平生四十七士の義を慕はれ自ら各所に義士談を講ず、翁は義士に關する藏書に富み、其確實の證據に就て探討し之を一篇となし世に公にせらる之を題して赤穂義士實談といふ儒者の實談頗るよろしきため夙に世の視説を動す抑も赤穂義士の事蹟は本朝千古の美談なれば或は演劇に淨瑠璃に歌謠に稗史小説に將た講演に仕組まれ其稗史たるは概ね牽強附會事實に錯誤多く荒唐無稽、到底士君子の讀むに堪ゆるものなし明治の宿儒恕軒翁茲に見る所あり鴻世の一大事蹟を徒に稗官軒乘家の手に戲弄せしむるを概し親しく獨特の健筆を以て義士復讐の顛末を目前に躍然たらしめらる。

一戸櫻外氏著

毛利元就

新刊 洋裝美製 定價金六十錢
菊判全一冊 郵税金 八錢

山陽山陰は大内、尼子の領土として、久しく太平の夢見つゝありけるが、陶隆房が隱謀により大内義隆を弑するや、永く秘せし謀叛氣が頭角を現はし、彼處此處に反旗の色めく様、急を呼ぶに迫りぬ、中にも吉田の城主、毛利元就、吊合戦に託ち、隆房が三万の大軍を嚴島に討ちてより、其勢ひ昇天の如く遠近に轟き渡りぬ、豊後の大友宗麟の二万餘も散々に敗られ、尼子が大軍も忠臣山中鹿之助の旗上げも敢なく敗れ、又秀吉が六萬もよく高松に防ぎし、毛利中興の歴史は、時代小説家の櫻外の筆に面白く描かる。しかも克く武士の眞髓を穿ち、英雄の心胸を開く、元就、元春、隆元、隆景、輝元初め當時英雄の表裏は紙上に溢れつゝあり。

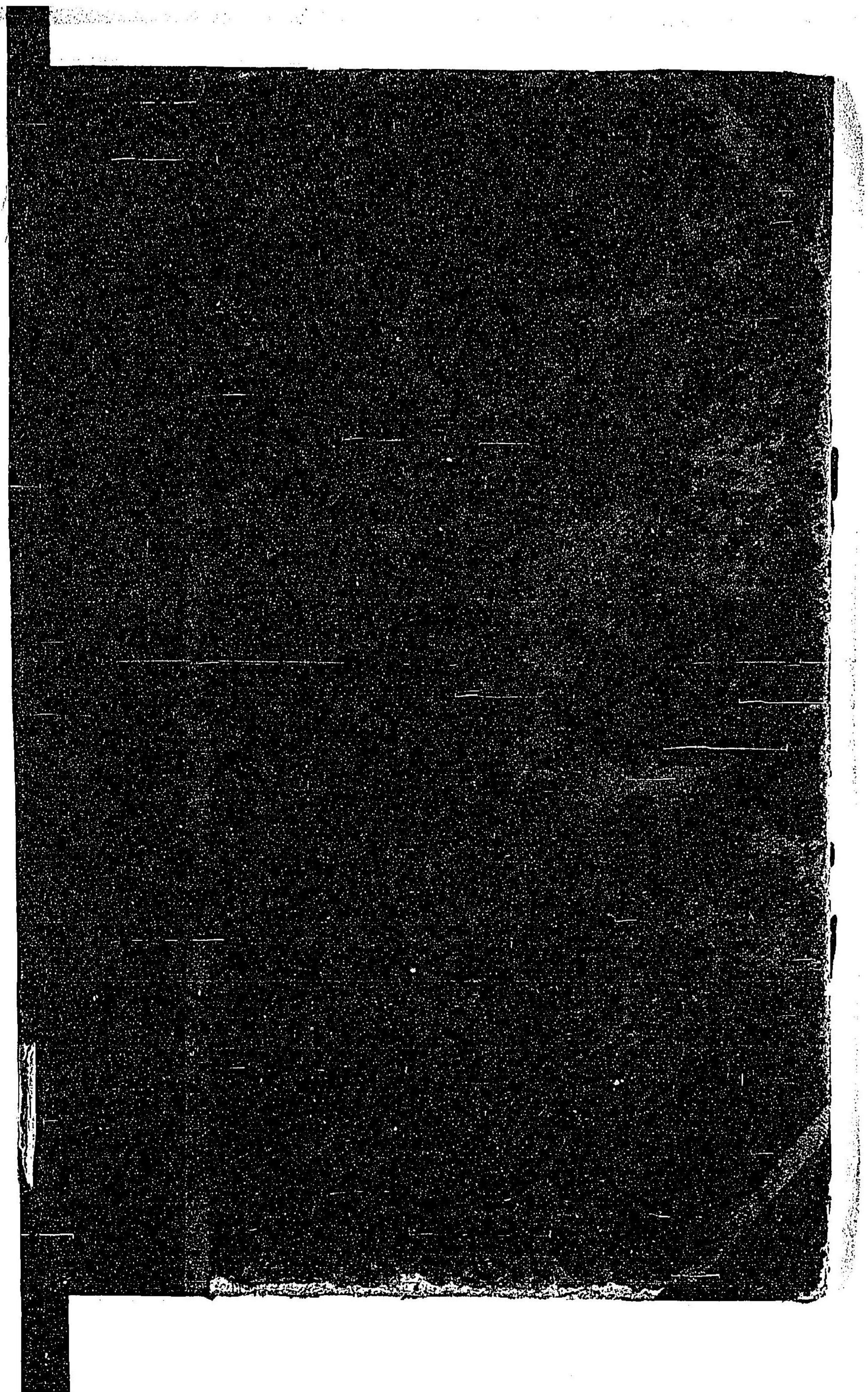
一戸櫻外氏著

武田信玄

好評第三版 洋裝美製 定價金六十錢
菊版全一冊 郵税金 八錢

應仁てふ治亂の闘を越して以來、太平の世も室町時代の末と共に去りて又も亂れる國となり西に元就起り、東に信長起る、甲斐の領主武田信玄も其時將に村上を追ひて信濃に平然として武威を逞しふし、川中島にて十八年間謙信と鋒を交へ、三方ヶ原にて家康を散々に苦しめ、遂に勝頼が長篠に敗けてより天目山にて滅ぶるの長物語。之を櫻外が艶麗なる筆に描かれたる時代小説、面白き中に武士の眞髓は克く開かれ、正史の錯誤も之によりて現はる。方今道義の頹敗を憂ふる士は勿論武士道の往時を憶ふ者子弟の墮落を憂ふるものは、之の健全なる思想を有する武士道小説を興へられよ。

279
16



279
16

101512-000-7

279-16

読書力の養成

横田 章/著

M42

EAA-0072

